

茨城県教育財団文化財調査報告第22集

科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

ツバタ遺跡
高山古墳群

茨城県教育財団調査票

昭和 58 年 3 月
68. 1. 10

調査番号
1. 472

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第22集

科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事

地内埋蔵文化財調査報告書

ツバタ遺跡
たか やま
高山古墳群

昭和58年3月

財団法人 茨城県教育財団

序

昭和60年に国際科学技術博覧会が、茨城県筑波研究学園都市を会場として開催されるため、現在、会場予定地約100haの造成工事を中心として、周辺の道路網の整備等、その受け入れ準備が茨城県によって進められております。この一環として、当会場への関連道路としての地方主要道「谷田部・明野線」バイパス建設も計画されたが、計画路線が通過する筑波郡谷田部町島名地区内に埋蔵文化財の存在することが確認されました。

財団法人茨城県教育財団は、この埋蔵文化財を記録保存するため、茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、昭和57年4月から9月まで、「ツバタ遺跡」・「高山古墳群」の発掘調査を実施いたしました。また、昭和57年10月から58年3月にかけて、これらを整理し、調査結果の報告書を刊行するはこびになった次第です。本書が、教育・文化向上の一環として広く活用されますことを希望してやみません。

調査・整理を進めるにあたり、委託者の茨城県をはじめ、御協力と御指導をいただいた茨城県教育委員会、谷田部町教育委員会および地元関係者各位に対して厚くお礼を申し上げます。

昭和58年3月








財団法人 茨城県教育財団

理事長 大金新一

例 言

1. 本書は、茨城県教育財団が、茨城県との委託契約に基づいて、昭和57年4月から9月末日まで調査を実施したツバタ遺跡、高山古墳群の発掘調査報告書である。
2. ツバタ遺跡、高山古墳群の調査にかかる当教育財団の組織は次のとおりである。

理事 長	大金 新一	
副理事 長	古橋 靖	
常務理事	綿引 一夫	
事務局 長	小林 義久	
調査課 長	寺内 寛	
企画 管理 班	班 長	疋 秀雄 (~ 昭和57年5月)
	班 長	今村 信夫 (昭和57年6月 ~)
	主任調査員	加藤 雅美
	主 事	鈴木 三郎
	主 事	海老沢 一夫
	主 事	綿引 良人
調査 第三 班 (高山 担当)	班 長	青木 義夫
	主任調査員	佐野 正 (調査・整理・執筆)
	主任調査員	小河 邦男 (調査)

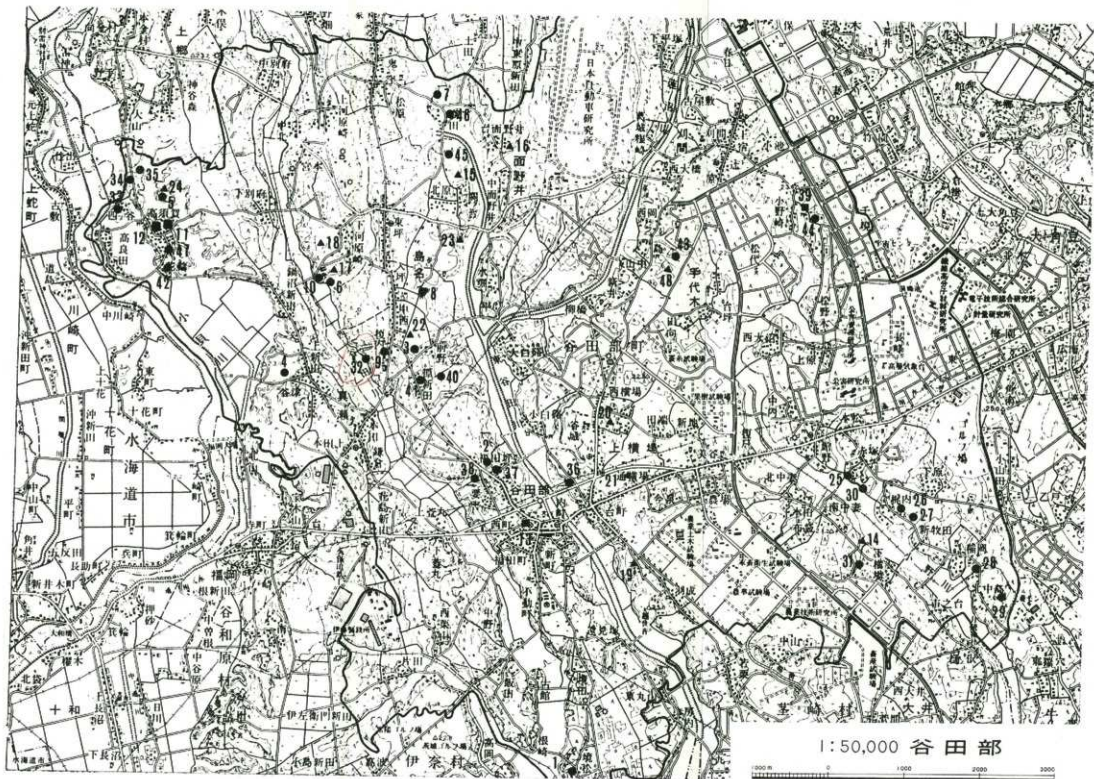
3. 本書での遺構は、下記のとおり記号をもって表示する。
S I 一住居跡 S K 一土壌 P 一柱穴・ピット
4. 本報告書で使用したスクリーントーンの表示は、次のとおりである。
かまど袖部・炉跡  焼土  炭化材 
石  粘土  赤彩  黒色処理 
5. 土層及び土器の色調については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社・昭和42年発行）を使用し、挿図内には記号化して表した。
6. 本書で使用したレベルは海拔高であり、竪穴住居跡等の深さは、それぞれの確認面からの計測値である。
7. 出土遺物の整理及び本報告書の執筆編集は発掘担当者の協力を得て、佐野正が行った。
8. 発掘調査や出土遺物の整理等に際して、御指導や御協力を賜った関係諸機関及び関係者各位に感謝の意を表します。

目 次

・序	
・例 言	
・目 次	
第1章 調査の経緯	3
1. 調査に至る経過	3
2. 調査経過	3
第2章 位置と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	7
第3章 遺構と遺物	10
第1節 ツバタ遺跡	10
1. 層序	10
2. 竪穴住居跡	13
3. 土塔	48
第2節 高山古墳群	51
1. 第1号墳	51
2. 第2号墳	60
第4章 まとめ	62
1. ツバタ遺跡	62
2. 高山古墳群	64

第 1 表 谷田部町遺跡一覽表

番号	遺跡名称	種別	時代	番号	遺跡名称	種別	時代
1	境松貝塚	貝塚	縄文	25	駒形遺跡	包蔵地	古墳
2	福田遺跡	包蔵地	"	26	梶内遺跡	"	"
3	前野遺跡	"	"	27	新牧田遺跡	"	"
4	山田遺跡	"	"	28	稲岡遺跡	"	"
5	熊の山遺跡	"	弥生	29	北中島遺跡	"	"
6	高山遺跡	"	"	30	八木遺跡	"	"
7	和田台遺跡	"	古墳	31	下横場遺跡	"	"
8	薬師遺跡	"	"	32	ツバタ遺跡	"	"
9	榎の内遺跡	"	"	33	中台遺跡	"	"
10	高山遺跡	窯跡	"	34	中台貝塚	貝塚	縄文・古墳
11	熊の山城跡	城館跡	中世	35	中台東遺跡	包蔵地	古墳
12	高須賀城跡	"	"	36	台成井遺跡	"	縄文
13	谷田部城跡	"	"	37	福田前遺跡	"	"
14	下横場古墳群	古墳群	古墳	38	福田坪池の台遺跡	"	"
15	関の台古墳群	"	"	39	小野崎館跡	城館跡	中世
16	面の井古墳群	"	"	40	タカドロ遺跡	包蔵地	縄文
17	高山古墳群	"	"	41	一町田遺跡	"	"
18	下河原崎古墳群	"	"	42	真瀬新田谷津遺跡	"	"
19	羽成古墳群	"	"	43	菊間遺跡	"	古墳
20	道心塚古墳群	"	"	44	小野崎遺跡	"	"
21	台町古墳群	"	"	45	関の台遺跡	"	"
22	榎の内古墳群	"	"	46	高田遺跡	"	"
23	烏名熊の山古墳群	"	"	47	ハナ遺跡	"	縄文
24	真瀬熊の山古墳群	"	"	48	菊間古墳	古墳	古墳



第1図 谷田部町内遺跡分布図

▲ 古墳及び古墳群 ■ 城跡 ● その他の遺跡

第1章 調査の経緯

1. 調査にいたる経過

昭和60年に国際科学技術博覧会が茨城県筑波研究学園都市を会場として、開催されることになった。茨城県では、昭和54年6月に国際科学技術博覧会推進室を発足させて準備体制を整え、同57年9月から約100haの会場の建設工事に着手した。これと並行して、科学万博関連道路整備計画を策定し、受け入れ体制の万全を期することとなった。

県道路建設課では、工事着工に先立ち、会場予定地及び当該道路整備予定路線内における埋蔵文化財の有無について、調査を県教育委員会に依頼した。同委員会では、『茨城県遺跡地図』に基づいて、地元教育委員会の協力を得て、分布調査を行った。その結果、科学万博関連道路として建設が計画された、地方主要道「谷田部・明野線(幅員23m)」バイパスの筑波郡谷田部町島名地区内に、「ツバタ遺跡」・「高山古墳群」の2遺跡が存在することが確認された。

このため、茨城県では、昭和57年3月に用地を買収し、財団法人茨城県教育財団に両遺跡の発掘調査を依頼した。これを受けて、当教育財団は、茨城県と委託契約を結び、昭和57年4月から両遺跡の発掘調査を実施することになったものである。

2. 調査の経過

ツバタ遺跡

ツバタ遺跡の調査対象面積は6,900㎡で、道路敷予定地という関係から、幅23m・長さ300mにわたる区域が調査対象となっている。調査対象区が細長いため、便宜上、中央付近を横断する下水路を境に、北側を北区、南側を南区とした。

発掘調査に際しての調査区設定の基準杭は、日本平面直角座標第IX系の原点を起点にした100m方眼の調査エリアに最も近い交点(X=5,700・Y=19,600)を基準点として、それより40m四方の大調査区を設定し、さらに大調査区を4m四方の小調査区に分割した。すなわち、40m四方の大調査区内に4m四方の小調査区が100個設定されるわけである。

大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」・「C」……とし、西から東へ「1」・「2」・「3」……と付して、A1区、A2区、……とした。小調査区は、北から南へ「a」・「b」・「c」……「i」・「j」とし、西から東へ「1」・「2」・「3」……「9」・「0」と



第2図 大調査区名称図

付して、その名称を「A1ca」・「B2ds」のように呼称した。ツバタ遺跡の調査区分割は、大調査区14地区にまたがる。調査方法等については、茨城県教育財団の調査要項に基づいて調査した。以下、発掘調査の経過について記していきたい。

4月9日～5月6日 調査区域の確認、作業員募集、雑木の整理、器材置場の設置、テント設営、発掘調査前の遺跡全景写真撮影など、発掘調査準備の作業を進める。

5月7日～5月10日 5月7日に搬入式を行い、同日から試掘を開始する。これにより、土層の地積状況及び遺物包含層・遺構確認面までの深さ等を確認し、併せて、重機導入による表土除去作業の基礎資料とした。

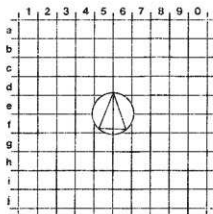
5月11日～5月24日 5月11日から遺構確認調査を開始する。北区及び南区の一部について、第1層（表土）、第2層（極暗褐色土）の発掘作業を行った。この調査については、便宜上、道路敷に並行して2m×4mの方眼状のグリッドを設定して、全グリッドのうち約25%の発掘を行った。調査の進展に伴い、南区からは住居跡が検出されたが、北区には遺構のないことがほぼ明らかとなった。5月21日から、大調査区設定のための基準杭打ち作業を行った。

5月25日～6月7日 遺構が検出された南区については、重機を導入して全面的に表土を排除し、これと並行して遺構確認を行った。この結果、古墳時代の竪穴住居跡10軒、土壇敷基を確認した。出土遺物は土師器片であり、量は多くはなかった。また、遺構確認調査と併行して、基準杭を基にしながら、小調査区設定のための杭打ち作業を行った。

6月8日～7月7日 6月8日から遺構精査を開始した。精査は調査区の南端I3区、H3区から開始し、第1号から第4号住居跡の調査を実施した。この結果、住居跡はいずれも古墳時代後期の竪穴式の遺構であることが判明した。

7月8日～7月26日 高山古墳群1・2号墳調査のため、本遺跡の調査を一時中断する。

7月27日～9月10日 7月27日、高山古墳群の調査と並行して本遺跡の調査を再開し、住居跡については第5号から第10号まで、土壇については第1号から第11号までの調査を実施した。この結果、第9号住居跡は古墳時代中期の遺構であり、その他の住居跡は古墳時代後期の遺構であることが判明した。9月10日、ツバタ遺跡の発掘調査を終了した。



第3図 小調査区名称図

高山古墳群

高山古墳群の調査対象面積は 800m²で、道路敷予定地内の幅約20m、長さ約40mの中に古墳2基が含まれている。道路敷という限定された調査対象区であることから、1号墳は約70%、2号墳は掘部の一部だけが調査対象となっている。

調査は、昭和57年6月1日から開始した。

発掘調査に際しての調査区設定の基準杭は、ツバタ遺跡の基準杭を北に1,000m、西に200m平行移動した点(X=6,700・Y=19,200)を基点として、ツバタ遺跡同様40m四方の大調査区を設定し、さらに大調査区を4m四方の小調査区に分割した。大調査区・小調査区の名称は、ツバタ遺跡同様に呼称した。

6月1日～6月28日 調査区域の確認、山林伐開後の雑木の処理、基準杭打ち、テント設置、小調査区設定のための杭打ち、墳丘測量、発掘調査前の遺跡全景写真撮影などを進めた。

6月29日～7月11日 古墳の規模及び形態確認のため、1・2号墳ともにトレンチ発掘を行った。この結果、1号墳は「方墳」であり、掘部の一辺が16.5mで、周囲に幅約3m・深さ約1.2mの溝が回っていることが判明した。2号墳は輓立貝状の古墳であることが確認された。

7月12日～8月10日 1号墳の盛土除去部分の拡張及び主体部の掘込み、精査を行った結果、1号墳主体部から奥堺石1枚と多数の石片及び多量の粘土が出土し、横穴式石室の構造を有する古墳であることが判明した。8月10日、高山古墳群(1・2号墳)の調査を終了した。

なお、9月30日には、筑波大学岩崎卓也助教授を招聘して両古墳についての御指導を仰いだ。

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

ツバタ遺跡は、茨城県筑波郡谷田部町島名字根内3211ほかに所在する。

谷田部町は、筑波山から南に延びる筑波台地の南部に属し、筑波郡のほぼ中央に位置する。西には、小貝川が北西から南東に向かって流れ、水海道市と西境界を形成している。また、いずれも牛久沼に注ぐ東谷田川と西谷田川の小河川が、町の中心部をはさむような形で、北西から南東に向かって貫流し、さらに、小河川小野川が南東方向へと流れている。これらの小河川の流域では、肥沃な水田地帯を形成しており、細長く延びる台地は、陸稲・小麦・野菜等の畑作地帯となっている。なお、筑波研究学園都市は町の北及び東部地区を含み、昭和60年に開催される科学万博予定地が北部地区に位置しており、都市化の波が急速に進みつつある。

ツバタ遺跡の所在する島名地区は、谷田部町の北西部に位置し、東谷田川と西谷田川とはさまれた台地上に立地している。この台地は標高23m、幅1～1.5kmで南東に細長く延びており、島名地区付近では東側がゆるやかに傾斜し、西側は比較的急な傾斜を示しながら、それぞれ東・西谷田川の沖積地へと続いている。この台地の中央部をほぼ南北に県道「谷田部一明野線」が通っており、島名の集落はこの県道の両側に開けた街村の形態をなしている。

ツバタ遺跡は、島名の集落の南西部に当たり、平坦な台地の西側縁部に位置する。現況は山林及び畑であり、水田面との比高は約10mである。「ツバタ」とは小字名で、「津畑」と書き、台地際は湧水が豊富で、現在でも水田の灌漑に利用されている。本遺跡の台地を形成する地層は、黒褐色土が50～60cm堆積し、この下に褐色のローム層が厚く堆積している。

高山古墳群は、谷田部町下河原崎三夜山 450番地ほかに所在する。

この古墳群はツバタ遺跡の北西約1kmの地にあって、西谷田川の一小支流によって、ツバタ遺跡の所在する同一台地から分かれて帯状に延びる小台地の南端部に位置する。同台地の標高は約22mであり、平坦な台地の南縁部にそって17基の古墳がある。周囲は山林であるが、かつて、高山中学校建設に伴って円墳3基が失われ、他に4基が盗掘の被害を受けているといわれる。この付近は、「^高山」とか「^高高山」とかといわれる。その由来は明らかではないが、「^高山^(注)」・「^高葛山」が転訛したものではないだろうか。

調査対象の1号墳と2号墳は、それぞれ『谷田部の歴史』による高山古墳群「4号墳」と「3号墳」に比定できる。

1号墳は、標高23mの同台地の南縁辺部から傾斜面にかけて、西谷田川に開ける低地を望むようにして立地し、2号墳は、1号墳よりも若干北側の平坦部に位置している。いずれも、墳丘部は山林となっており、地層は約40cmの暗褐色土の下に褐色のローム層が厚く堆積している。

(注) 『谷田部の歴史』(昭和50年9月谷田部町教育委員会発行)による。

2. 歴史的環境

谷田部町は、筑波山麓に続く筑波台地上の一角に位置するが、太古には、太平洋の海水が霞ヶ浦・牛久沼を経て、東谷田川・西谷田川まで深く浸入していたと思われる。さらに、霞ヶ浦から続く小河川にはさまれた谷田部町の台地上には、古くから人々の生活の営みが続いていたことを知ることができる。

境松をはじめ、福田、山田、鍋沼新田などの地内においては、縄文時代中～後期の石器や土器が多量に出土しており、当時、水と魚貝類、鳥獣類を求めて人々が住みつき、集落を構成していたことが考えられる。

弥生時代には、当地方の河川や池沼周辺などの水の得やすい低地で、稲作が始められたことが推測されるが、現在のところ明確な遺跡は確認されていない。

古墳時代に入ると、古墳は、数量において県下第1位を誇り、集落跡も多数確認されている。谷田部町の古墳群としては11か所が知られ、このうちの7か所までが町の北西部、鳥名・真瀬地区に集中している。すなわち、関の台・高山・下河原崎・前野・榎内・鳥名熊の山・真瀬熊の山・面野井各古墳群である。大規模古墳はないが、昭和34年の分布調査では約300基の古墳が確認されており、直径10m台の小円墳が主体をなしている。ことに、下河原崎古墳群・下横場古墳群は群集墳として知られている。集落跡としては、薬師遺跡・榎内遺跡・ツバタ遺跡・高山遺跡・菊間遺跡・大塚祭祀遺跡等が確認されており、古墳時代後期から終末期にかけて、有力な豪族の支配のもとで組織的な生産活動がはかられ、先進的な繁栄がみられたものと考えられる。

平安時代に記された『和名抄』によると、現谷田部町を含む「河内郡」には「嶋名、河内、大山、八部、真幡、菅田、大村」の7郷の名が記されており、古墳の存在・遺跡の分布状況とも考え合わせると、鳥名付近は奈良・平安時代にはすでにかんりの集落となっていたものと思われる。

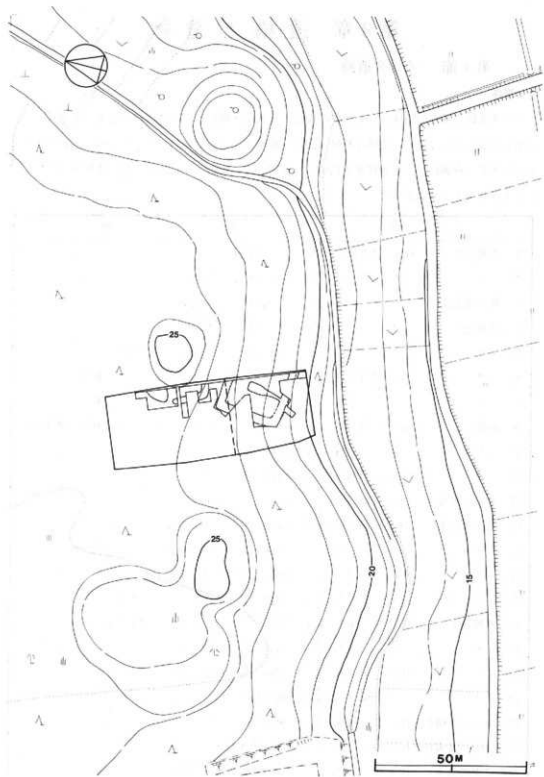
さらに、南北朝時代には、小野崎城・菊間城・面野井城などが知られ、いずれも戦国時代にかけて小田城の幕下となり、北部の佐竹氏と対抗していた。

小田氏が敗れ、佐竹氏が秋田へ移封された後の江戸時代には、外様大名である細川氏が、町の中心である内町に陣屋を構えてこの地の多くを領していた。県指定天然記念物になっている不動並木が、当時の街道のようすを今に伝えている。鳥名付近は、天領や旗本領によって細かく分割され、幕末に至っている。

(注) 『茨城県遺跡地図』(昭和52年11月茨城県教育委員会発行)



第4図 ツバタ遺跡周辺地形図



第5图 高山古坟群1・2号墳周辺地形图

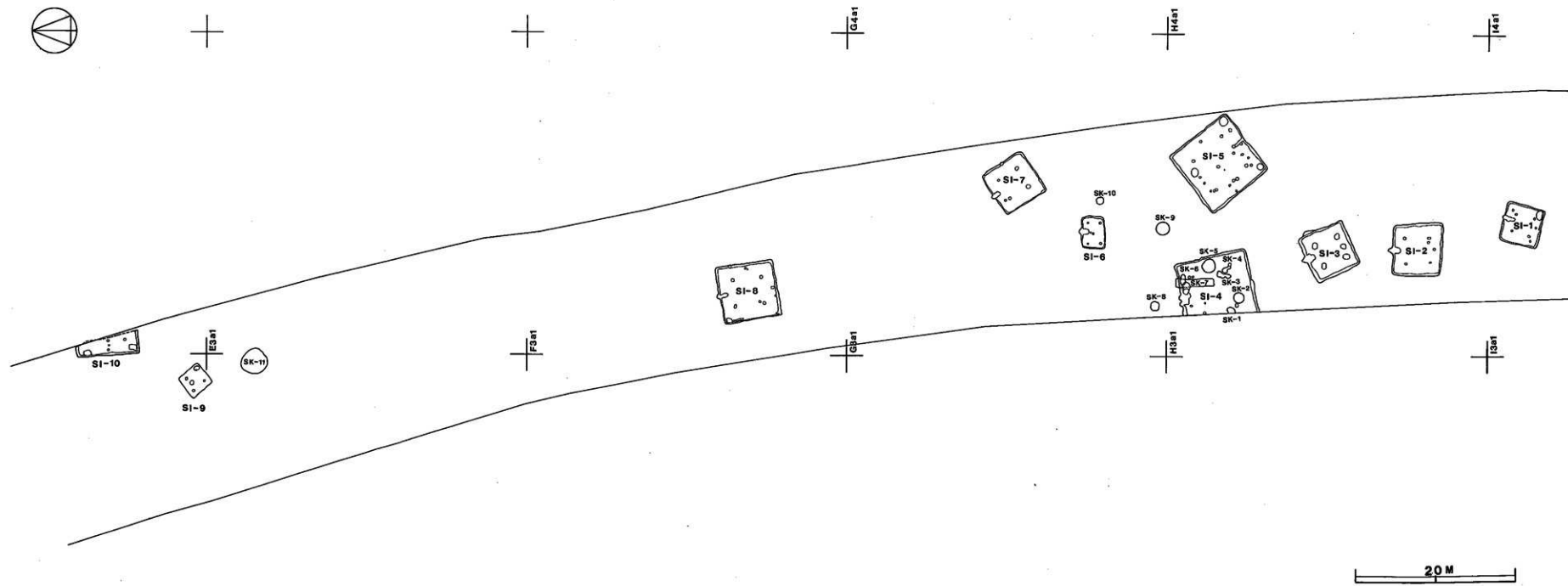
第3章 遺構と遺物

第1節 ツバタ遺跡

1. 層序

ツバタ遺跡の基本的層序は、I層極暗褐色土(表土・耕作土)・II層暗褐色土・III層ロームの3層から成り立っている。遺構はII層下部及びIII層上面で確認されている。ツバタ遺跡の土層解説及び土器の色調は、「新版標準土色帖」を使用した。なお、住居跡その他の土層解説には下記に示す記号をもって表記した。

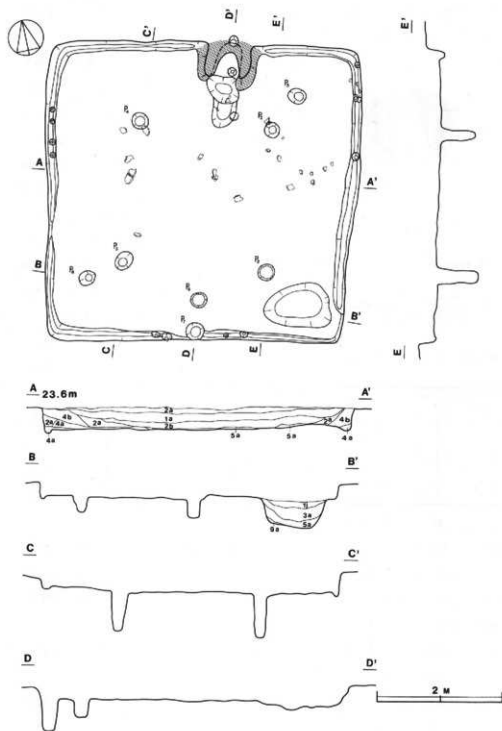
色 調		含 有 物
1	黒褐色土 Hue 7.5 YR $\frac{3}{6}$	a ローム粒子
2	" "	b ローム粒子 ロームブロック
3	極暗褐色土 "	c ローム粒子 炭化粒子
4	暗褐色土 "	d ローム粒子 焼土粒子
5	" "	e ローム粒子 炭化粒子 焼土粒子
6	" Hue 10 YR $\frac{3}{6}$	f ロームブロック ローム粒子 炭化粒子
7	" "	g ロームブロック ローム粒子 焼土粒子
8	褐色土 Hue 7.5YR $\frac{3}{6}$	h ロームブロック ローム粒子 炭化粒子 焼土粒子
9	" "	i 山砂
10	" Hue 10 YR $\frac{3}{6}$	j 山砂 ローム粒子
11	にぶい褐色土 Hue 7.5YR $\frac{3}{6}$	k 山砂 粘土粒子
12	暗赤褐色土 Hue 5 YR $\frac{3}{6}$	l 山砂 ローム粒子 焼土粒子
13	" "	m 山砂 ローム粒子 焼土粒子 炭化粒子
14	" Hue 2.5YR $\frac{3}{6}$	n 山砂 焼土ブロック
15	" "	o 山砂 ロームブロック 焼土粒子
16	赤褐色土 Hue 5 YR $\frac{3}{6}$	p 山砂 ロームブロック 焼土ブロック
17	" "	q 山砂 灰 焼土ブロック
18	" Hue 2.5YR $\frac{3}{6}$	r 山砂 粘土 焼土粒子
19	" "	s 焼土粒子
20	にぶい赤褐色土 Hue 5 YR $\frac{3}{6}$	t 焼土ブロック
21	にぶい黄褐色土 Hue 10 YR $\frac{3}{6}$	u 灰 焼土粒子
22	暗灰褐色土 Hue 7.5YR $\frac{3}{6}$	v 灰 焼土粒子 炭化粒子
23	灰褐色土 "	



第6図 ツバタ遺跡遺構配置図

2. 竖穴住居跡

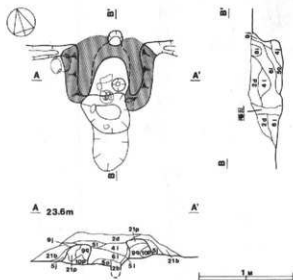
第1号住居跡 (第7图)



第7图 第1号住居跡実測图

本住居跡は、調査区I3bs区を中心に確認され、第2号住居跡の南側7mほどに位置している。主軸方向はN-15°-Eで、平面形は長軸5.0m・短軸4.8mの隅丸方形を呈している。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20~35cmほどで、北壁が多少高くなっている。床はロームではほぼ平坦であるが、中央よりやや南側の床面は多少攪乱をうけている。



第8図 第1号住居跡カマダ実測図

カマドは北壁やや東寄りに構築されている。遺存度は良好で、壁を20cmほど三角形に掘り込んで煙道部となし、火床は床面から10cmほど掘り込まれている。袖部は粘土混りの山砂で構築され、北壁より住居側に60cmほど突出し、土器設置部や煙道部が検出された。焚口部及び燃焼部の底部は、高熱による赤褐色ロームブロックとなっていて極めて硬い。燃焼部には、半完形の埴形土器はほぼ1個体分が倒立した形で出土している。

ピットは8個検出され、P₁~P₄は各々対角線上に位置し、主柱穴と考え

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	27	27	58	主柱穴	P ₅	29	26	25	
P ₂	30	28	62	"	P ₆	26	26	27	
P ₃	33	28	60	"	P ₇	30	30	54	
P ₄	30	27	70	"	P ₈	28	23	22	

られる。直径はそれほど大きなものではなく、深さは60~70cmである。P₅とP₆はそれぞれ

れP₁とP₃の支柱穴とも考えられる。P₆・P₇も本住居跡に伴うものと考えられる。

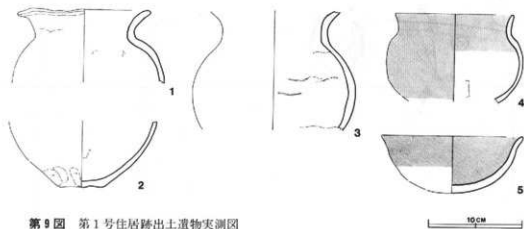
各壁下から壁溝が検出された。とくに北壁下の壁溝は遺存状態がよく、上面幅15~20cm、深さ10~15cmである。南寄りの壁下には、多少の攪乱もみられ、壁溝の遺存状態も良好とはいえない。

壁溝の底部からは10個ほどの小ピットが検出された。壁柱穴と思われるが、規模は貧弱で、間隔も極めて不統一であり、断定するにはやや不充分である。

貯蔵穴は、南東コーナー部に検出された。長径1.1m・短径約0.7mの不整楕円形を呈し、住居跡の床面からの深さは45cmほどで、底部は卵形を呈する。

覆土は自然堆積の状態を示し、第1層及び第2層は黒褐色土が堆積し、しだいに、極暗褐色土から褐色土へと移行して床面に至っている。

出土遺物 (第9図)



第9図 第1号住居跡出土遺物実測図

本跡からは、坏・壺・甕等の土器がカマド付近を中心におもに破片の形で出土している。

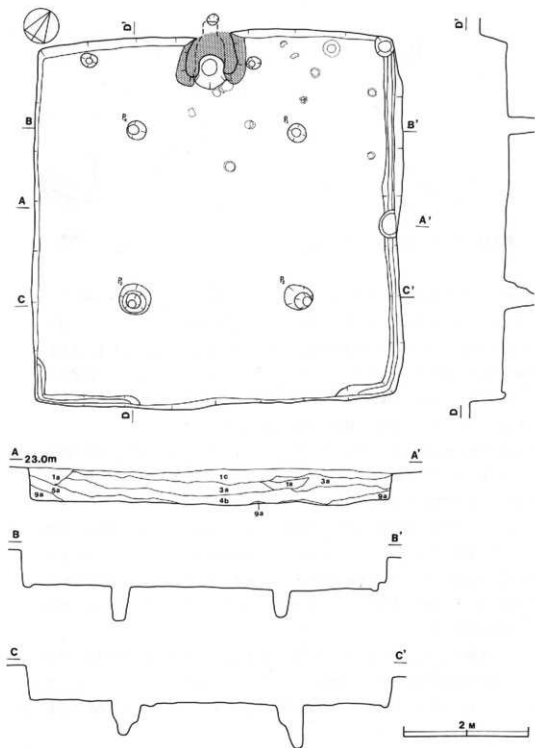
1・2は、カマド西袖部下からこわれた形で出土した壺形土器であり、1・2で1個体分と思われる。口径は14.2cmであるが、胴部中央部が欠損しており器高及び最大径は想像の域を出ない。外面は口縁部が横ナデ、胴部はナデによる整形であり、内面は口縁部が寛ナデ、胴部がナデによる整形がなされている。全体的に雑である。色調は、外面が暗褐色で、内面は黒褐色を呈し、やや風化している。胎土には多くの砂粒と微量の雲母片が含まれている。

3は、中央部床面から破片で出土した壺形土器の一部である。最大径は17cm程度と思われるが、残存部が40%ほどで、器高その他は不明である。胴部は寛削り後ナデによって整形されている。色調はにぶい赤褐色で多少黒化している。

4は、カマド燃焼室覆土中から出土した甕形土器である。器内面と外面を赤彩し、底部は欠損している。胴部はややつぶれたような球形を呈し、口縁部は短くやや外反ぎみに立ち上がる。口径は12.6cm、最大径約14.5cmで胴部中央部にある。胴部は器内・外面ともに寛ナデ整形が、口縁部は横ナデによる整形が施されている。色調はにぶい橙色で、内面は黒ずんでいる。器厚はうすく、焼成は良好である。

5は、南壁下付近及び中央部の床面から破片で出土し、内・外面ともに赤彩された坏形土器である。底部は丸底で球形を呈し、口縁部でゆるく外反する。口径15.1cm・器高6.1cmで内・外面ともにていねいに寛ナデが施され、口縁部は横ナデ整形がみられる。色調は赤褐色で外面底部は黒化している。

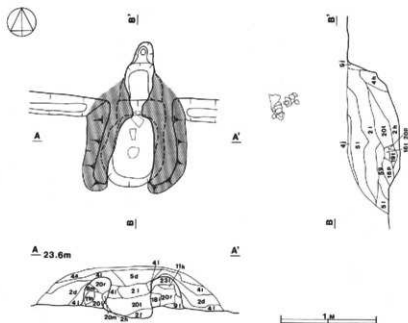
第2号住居跡 (第10図)



第10图 第2号住居跡実測图

本住居跡は、調査区H3h₄を中心に確認され、第3号住居跡の南側5mほどに位置している。主軸方向はN-5°-Wで、平面形は長軸6.3m・短軸6.2mのほぼ正方形にちかい隅丸方形を呈している。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40~45cmほどで、西壁は多少ふくらみをもっている。床はロームで、やや凹凸があるが、全体的にかたくしまっている。ことに、カマド前面には焼土が多量に散布し、きわめて硬い。また、南東部床面にはブロック状の焼土が張りつき、北西コーナー付近には焼土及び炭化物の混入土が張りついて、生活の場を感じさせる。



第11図 第2号住居跡カマド実測図

カマドは、北壁中央部に構築され、遺存状態は良好である。壁を60cmほど掘り込んで煙道部とし、火床は床面を10cmほど掘り込んでつくられている。火床中央部のレンガ状の焼土ブロックは、厚さが20cmにも及び、支脚の役割を果たしたものと思われる。袖部は、粘土混りの山砂で構築

され、内側は高温による赤褐色の焼土ブロック状を呈する。

ビット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ビット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	36	34	50	主柱穴	P ₄	28	24	42	主柱穴
P ₂	29	25	52	//	P ₅	25	24	47	
P ₃	24	23	44	//					

ビットは、5個検出された。P₁~P₄は各々ほぼ対角線上に位置し、いずれも主柱穴と考

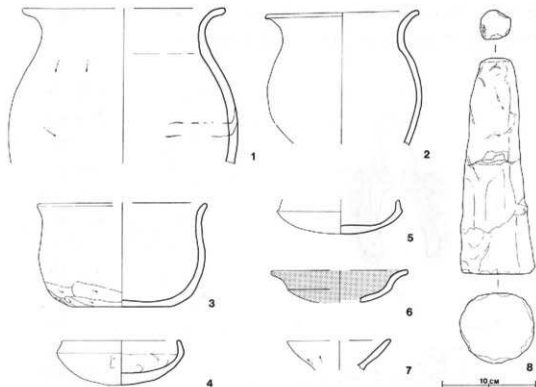
えられる。直径は24~26cmであり、深さは42~52cmである。南壁のほぼ中央に近い床面に、主柱穴とはほぼ同規模のビット (P₅) が検出された。出入り口の施設の一部とも考えられる。

壁下には壁溝が回っている。幅18cm前後、深さ10~15cmで、各壁下を全周する。壁溝底部から壁柱穴が検出された。直径10cm・深さ10~15cmを測り、30~60cm程度の間隔で、各壁下をほぼ平

均的に回っている。

覆土は、自然堆積の状態を示し、極暗褐色土を主体としている。

出土遺物（第12図）



第12図 第2号住居跡出土遺物実測図

本跡床面のほぼ全面から、土師器片が出土しているが、全体として小片が多い。カマド燃焼部付近からは、支脚の一部と思われる焼土塊があり、この上から高坏や甕形土器等の破片が出土している。

1は、カマド内から出土した甕形土器の胴部の一部である。断片から推定すると器高が30cm程度と思われる。外面はナデによる整形がなされ、焼土がかたく付着している。内面は、篋ナデによって整形されている。いずれにもい褐色を呈し、胎土中には砂粒・スコリアが含まれ、器厚は厚手である。

2は、カマド内からこわれた形で出土した、甕形土器の上半分である。口縁部と胴部中位の直径がほぼ同じで、16.2cmである。頸部内径は約11cmで、口縁部は比較的急に外反する。整形は口縁部が横ナデ、胴部内面は篋ナデ、外面は篋磨きとなっている。色調は暗赤褐色を主体とし、多少黒化している。胎土には砂粒及びスコリアを含んでいる。

3は、南東寄りの床面から破片で出土した鉢形土器である。残存率は30%程度である。底部は平らで、胴部はほぼ垂直に直線的に立ち上がり、そのまま口縁部となってゆるやかに外反する。底部近くは内・外面ともに篋削り、胴部から上がナデとなっている。色調は外面がにぶい橙色を主とし、内面はにぶい黒褐色を主体とする。胎土は砂粒を多量に含んでいる。

4・5・6は坏形土器で、底部はいずれも丸底である。4は、南壁下から出土したほぼ完形の坏形土器である。口径は12.5cm、器高は4.8cmを測る。体部は短く、やや内彎して立ち上がる。底部は内・外面ともに篋削り後、ナデによって整形され、体部は横ナデによって整形されている。色調はにぶい黒褐色を呈し、黒化している。胎土には砂粒を多く含む。5は、北東コーナー床面からこわれた形で出土した。底部はゆるい弧を描いて立ち上がり、体部は後縁を残しながら短くほぼ垂直に立ち上がる。口径は12.3cm・器高は3.6cmである。底部は内・外面ともにナデによる整形がなされ、体部は内・外面ともに横ナデ整形が施されている。色調はにぶい灰褐色を呈し、胎土中には砂粒・スコリアを含む。6は、南東壁近くの床面から破片で出土しており、完存率は約30%である。口縁部は底部から大きく開き、口径約14.6cm・器高3.4cm程度と思われる。体部は「く」の字状に内彎してあざやかな後縁をつくり、さらにゆるく弧を描きながら外反する。体部は内・外面ともに横ナデによる整形がなされ、よく整っている。全面に黒色処理が施されている。

7は、器台の底部であり、直径11.0cm、内・外面ともに黒色処理が施されている。

8は、カマド内から二つに折れて出土した支脚である。基部径7.8cm・上部径3.0cm・高さ22.8cmで、上部がすばまった円柱形を呈する。胎土は粘土中に多量の砂粒とスコリアを含み、色調は赤褐色を呈している。

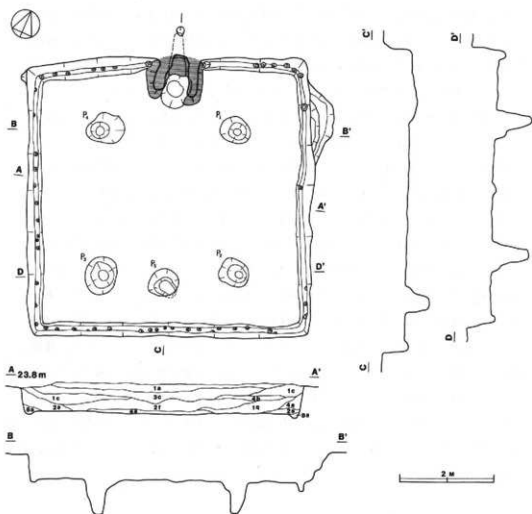
第3号住居跡（第13図）

本住居跡は、調査区113ca、H3F₁を中心に確認され、第4号住居跡の南側8mほどに位置している。主軸方向はN—24°—Wで、平面形は長軸5.9m・短軸5.8mの隅丸方形を呈している。

壁は明瞭ではほぼ垂直に立ち上がり、壁高は45～55cmで南壁に比べて北壁がやや高い。床はロームで、多少凹凸がみられるが全体的に硬くしまっている。カマド周辺には焼土が散布し、少量の炭化物も混入して暗赤褐色土の硬い床面となっている。

カマドは、北壁中央部に構築され、遺存度は比較的良好である。煙道部は北壁を60cmほど掘り込んでつくられ、カマドの中心部からほぼ水平に煙排出口の真下まで続き、ここからは垂直に立ち上がっている。袖部は粘土泥りの山砂を主体として、焼土ブロックが少量混入された土で構築され、内側は極暗赤褐色の硬質焼土ブロックとなっている。焚き口部及び灰原部も焼土ブロック状を呈して、長年の使用の跡を感じさせる。

ピットは、5個検出された。P₁～P₄は各々対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。いずれ



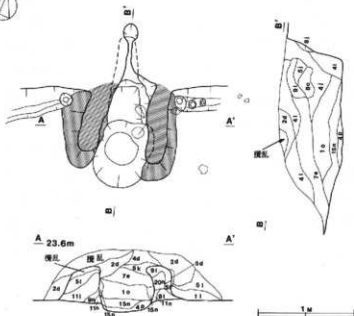
第13図 第3号住居跡実測図

ピット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	外66 内36	57 35	67	主柱穴	P ₄	外80 内40	70 36	75	主柱穴
P ₂	外62 内44	56 34	77	"	P ₅	外66 内48	58 40	53	
P ₃	外82 内56	66 48	71	"					

の覆土中からは山砂が多量に検出され、P₄には少量の焼土も含まれている。P₅は、P₂とP₃の間に検出され、主柱穴と同規模、同形状のピットである。出入り口の施設の一部かとも考えられる。

壁溝は、カマド部を除く全壁下にまわっている。上面幅平均約20cm、床面からの深さ約10cmで、底部はほぼU字形を呈する。壁溝底部からは50個ほどの壁柱穴が確認された。直径7~10cm、深

も二段構造で、掘り方は大きく、床面での直径は60~80cmで、深さは53~77cmである。カマドに近いP₁とP₄



第14図 第3号住居跡カマド実測図

土した甕形土器の胴部の一部である。この断片から推定すると、器高が30cm程度と思われる。外面はナデによる整形がなされ、ブロック状の焼土がかたく付着している。内面は篋ナデによって整形され、にぶい褐色を呈している。胎土は砂粒・スコリアを含み、器厚は比較的厚い。

2～6は、いずれも環形土器であり、扁平な丸底状を呈する。底部は、篋削り後篋ナデによる整形が、体部は横ナデによる整形が見られるものが多い。2は、北西壁近くの床面からこわれた

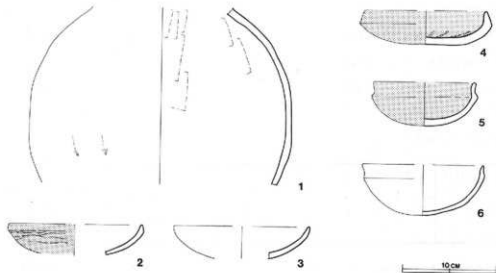
さ10～15cmで、30～60cm程度の間隔で各壁下にまわっている。

覆土は、自然堆積の状態を示し、黒褐色土、極暗褐色土を主体として、床面に近づくにつれて褐色を呈するようになる。

出土遺物(第15図)

床面のはほぼ全面から、比較的多くの土器が破片の形で出土している。中でも坏の出土が目立つ。

1は、カマド内から出



第15図 第3号住居出土遺物実測図

形で出土した。口縁部は内傾して短く立ち上がる。口径14cm・器高3.2cmほどで、底部は浅い皿状を呈してゆるやかに立ち上がり、体部との境には稜線が見られる。器内面は口縁部で横ナデ、体部はナデによって整形されて、底部は一部黒化している。胎土中には砂粒を少量含む。3は、北西壁近くからこわれた形で出土した。口径14.4cm・器高3.5cmほどで、体部は短くほぼ垂直に立ち上がる。器外面にはふい橙色を呈し、多少黒化している。体部は磨滅がはげしい。胎土は砂粒及びスコリアを含み薄手である。4は、南壁近くの床面からこわれた形で出土した。底部は、ほぼ平らで、比較的厚手である。体部は短く、やや内傾きみで、底部との境には明瞭な稜線が見られる。色調は内部が灰褐色、外面は黒褐色でありススが付着している。5は、カマド付近の床面からこわれた形で出土し、全面に黒色処理が施された坏形土器の一部である。底部は丸底状を呈し、体部との境で「く」の字状に折れ曲がったのち口縁部でゆるく外反する。口径10.7cm・器高4.6cmほどで焼成は良好である。6は、カマド内から出土した。底部は比較的深い丸底状を呈しほぼ球形に立ち上がる。体部は短く、ゆるい「く」の字状を呈したのち、口縁部で軽く外反する。口径13cm・器高は5.4cmである。

第4号住居跡（第16図）

本住居跡は、調査区H3b₁、H3b₂を中心に確認され、第5号住居跡の西側4mほどに位置する。土軸方向はN-13°-Wで、規模は1辺が9.0mほどの隅丸方形を呈する大型住居跡である。ただ、西側部が調査エリア外となるため、全容を把握することはできなかった。

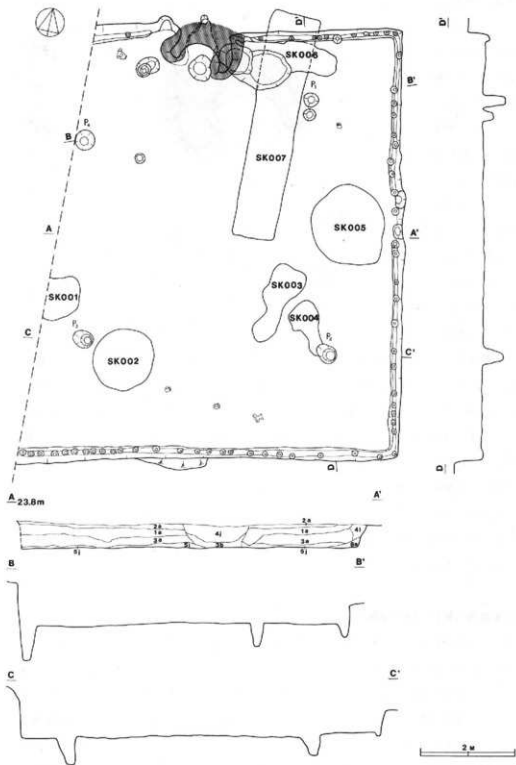
壁は明瞭でほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40～60cmで、北壁に比して南壁がやや高い。床はロームであるが、カマド付近は山砂と焼土が混入し、よくしまっている。中央部はややしまりなく多少明確さに欠ける。

カマドは北壁に接して2基確認された。カマドAは、北壁中央より多少東寄りに構築され、遺存度は比較的良好である。煙道部は北壁を30cmほど掘り込んでつくられ、火床は床面を15cmほど掘り込んでつくられている。袖部は粘土混りの山砂で構築され、左袖部は多少くずれが目立つ。このカマドのすぐ西側に、かつて使用されたと思われるカマドBが存在する。袖部はカマドAを構築するために除去されたものであろう。

ビット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ビット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	37	32	46	支柱穴	P ₂	44	36	57	支柱穴
P ₂	45	37	45	＃	P ₄	44	40	78	＃

ビットは、7個
検出されている。
P₁～P₄は各々ほぼ
対角線上に位置し、

支柱穴と考えられる。直径は37～45cmで、深さは45～78cmである。P₂とP₄は2段に掘り込まれ、P₂の浅いところからは炭化物が少量出土している。他の3個も本住居跡に伴うものと推測される。



第16图 第4号住居跡实测图

壁溝が各壁下にまわっている。上面幅15~22cm、深さ7~10cmで、南東壁下が多少広くなっている。壁溝底部からは壁柱穴が検出されている。直径10cm・深さ20cm程度のもが多い。間隔は一定しないが、平均して60~70cmである。

貯蔵穴は北壁下

に2基確認されている。貯蔵穴Aは、カマドAの東約1mの位置にあり、長径80cm・短径70cmの円筒形状を呈する。底面は平坦で、住居跡の床面からの深さは56cmほどである。貯蔵穴Bは、貯蔵穴Aを切るような形で、すぐ東側に複合して検出された。直径90cmほどで、平面形はほぼ円形を呈し、深さは45cmほどである。底面は平坦で、立ち上がりは比較的急である。A・B2基の貯蔵穴は、それぞれカマドA・Bに伴うものと推定される。

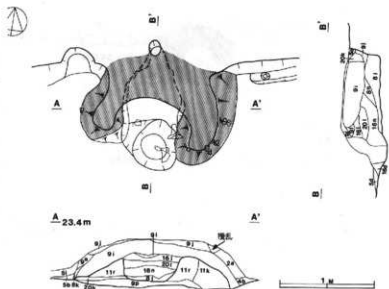
覆土は自然堆積の状態を示し、中段までは黒褐色土が主体で、床面に近づくにつれてロームを多く含むようになっている。

なお、本住居跡の床面からは、7基の土壌が検出されているが、いずれも、この住居跡よりは新しいものと考えられる。

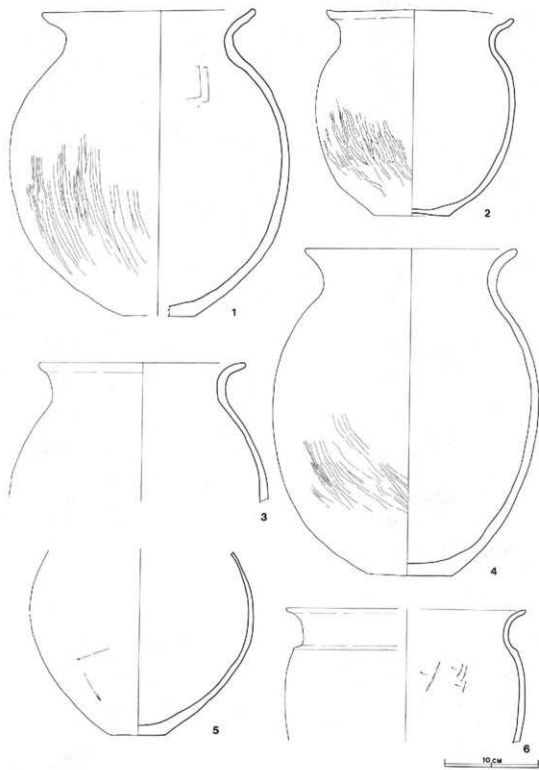
出土遺物（第18・19・20図）

床面のほぼ全面から杯・壺・甕・甗等の土師器片が出土している。ことにカマド付近からは完形・準完形品の出土が見られる。

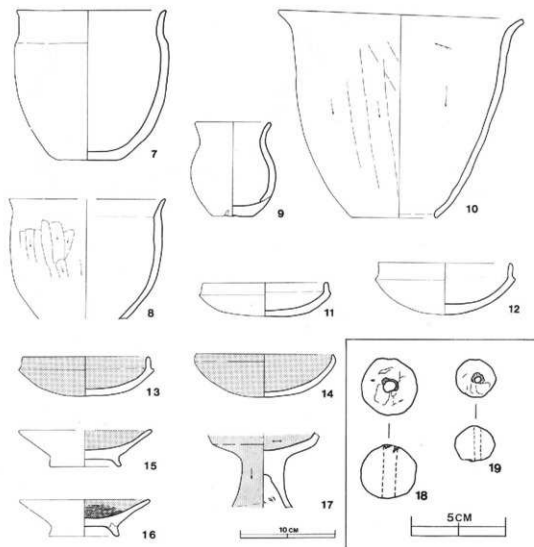
1~9は甕形土器である。1と4はいずれも口径約22cm・器高34cm内外でつぶれた形で出土した。1は、南西壁寄りの床面から出土した。胴部はほぼ球形を呈し、頸部は短く、口縁部はやや外反して直線的に立ち上がり、口唇部は若干内彎している。胴部の下部は荒い荒磨きで、口縁部は横ナデによる整形がなされ、外面の一部が黒化している。4は、カマド前面の床面を中心に出土し、やや副長で若干肩が張っている。色調は暗褐色を呈し多少黒化している。いずれも胎土に



第17図 第4号住居跡カマド実測図



第18图 第4号住居跡出土遺物実測図



第19图 第4号住居跡出土遺物実測図



第20图 第4号住居跡出土土器拓影図

は砂粒を多く含む焼成は良好である。6は、完存率20%程度であるが、胴部から頸部への境目がほぼ水平な稜線によって明瞭に区画されている。口径は2.5cm内外と思われる。7はカマド西側の床面からつづれた形で出土した小型の甕形土器で、口径16.0cm・底径6.5cm・器高15.9cmを測る。やや胴長で最大径は肩部にある。頸部はくびれが極めて少なくほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で多少外反している。やや粗雑な仕上がりで胎土には砂粒を多量に含んでいる。色調は暗褐色で内・外面ともに多少黒化している。9は、やや北東壁寄りの床面から出土した完形の小型甕で、口径8.1cm・器高10.0cmである。口縁部はほぼ直線的に外向し、胴部は卵形を呈し、最大径は胴部中央よりやや上位に位置する。整形は口縁部が横ナデ、胴部はナデ整形であるが摩滅気味である。胎土には荒い砂粒を含み、若干粗雑な作りとなっている。

10は、カマド西側の床面からつづれた形で出土した甕形土器である。口径26.0cm・器高21cm・底部孔径8.0cmを測る。胴部はごくゆるい弧をえがきながらやや単調に口縁部まで立ち上がり、ここから急に外反して口縁部に至る。内面は丁寧な篋ナデによる整形がなされている。色調は内面が明褐色であり、外面はにぶい褐色を主体として多少黒化しており、甕としての使用の跡をうかがい知ることができる。胎土は砂粒を含み薄手で、焼成は良好である。

11～14までは環形土器で、床面のほぼ全面から散見される。口径13.2～14.6cm、器高3.6～5.5cmである。いずれも底部は丸底でゆるく立ち上がる。11～13は、体部と底部の境に明瞭な稜線を有し、体部は比較的短くやや内彎して立ち上がる。11は、にぶい褐色を呈し、器厚は比較的厚く、12はやや深くにぶい褐色を呈する。14は、内・外面ともにうすく黒色処理が施され、体部はごく短く、内彎きみである。これらの環形土器は、いずれも底部は削削り後、篋ナデ、体部は横ナデによって整形されている。胎土は砂粒と若干のスコリアを含み、焼成は良好である。

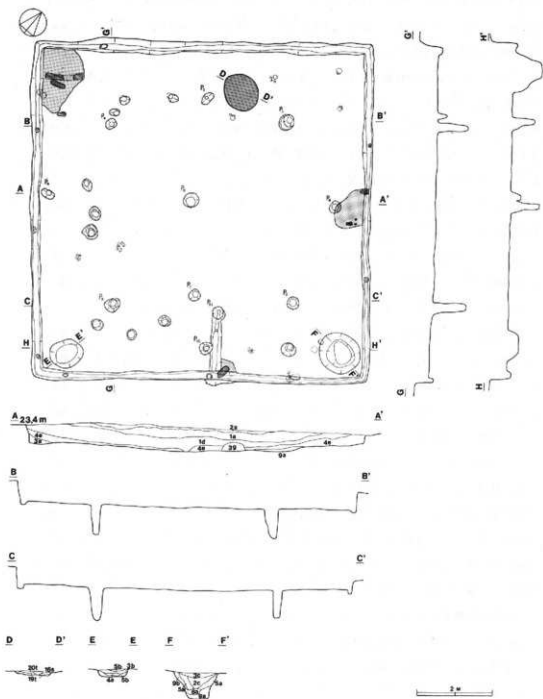
15と16は、高台付の環で完存率は40～50%である。口径13.8～14.2cm、器高はいずれも3.9cmで高台部の底径は7.4～7.6cmである。体部は高台部からごくゆるやかに立ち上がって口縁部で若干外反する。いずれも高台部は低く、横ナデによる整形が施されている。体部外面はナデ整形で、内面は篋ナデによる整形のあと、篋による磨きかけられている。胎土は砂粒を多く含む焼成は良好で、内面はうすく黒色処理が施されている。

17は高環の脚部である。内・外面ともに赤彩されており、残存率は約30%程度である。

18・19は土玉である。18は直径3cmの球形を呈し、中央には口径0.5cmの小孔かうがたれている。色調はにぶい赤褐色で重量は21.8gを測る。19は、カマド燃焼部から出土したやや小ぶりの土玉で重量は6.6gである。

拓影図A・Bは覆土中から出土した須恵器片である。外面には平行線叩き目が見られ、緑色自然釉が付着している。内面には同心円紋が見られ、胎土には長石・石英を含む。同一個体であろう。

第5号住居跡 (第21図)



第21图 第5号住居跡实测图

本住居跡は、調査区II3b、H3b7を中心に確認され、第6号住居跡の南東12mほどに位置する。主軸方向はN-39°-Wで、規模は1辺が9.0mほどの隅丸方形を呈する大型住居跡である。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30～50cmで、北及び西壁に比べて南・東壁がやや低い。床はロームで、中央部がやや低くなっているが、全体としては平坦で、よくしまっている。北西コーナー付近からは、焼土や炭化物が少量に検出された。

炉跡が中央部より北西壁側に位置している。長径105cm・短径90cmのほぼ楕円形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘り込んでいる。灰床は赤褐色に硬く焼け、覆土には焼土が充満している。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	46	38	78	支柱穴	P ₇	30	30	40	
P ₂	32	30	74	"	P ₈	31	30	37	
P ₃	42	34	84	"	P ₉	38	24	35	
P ₄	30	30	78	"	P ₁₀	35	32	75	
P ₅	28	24	49		P ₁₁	32	30	30	
P ₆	42	40	41						

ピットは10数個検出された。P₁～P₆は各々対角線上に位置し、支柱穴と考えられる。P₇～P₁₁は棟持柱跡とも推測される。直径

はそれほど大きなものではなく、深さは40～70cmである。幅約25cm・深さ15～20cmの溝が南東壁中央部から床面中央に向かって1.6mほど続いており、この先端には、直径30cmほどのピットが検出された。間仕切りで使用されたものと思われる。

壁下には、壁溝が一周している。幅15～20cm・深さ10～15cmである。

貯蔵穴は、2基検出された。貯蔵穴Aは東コーナー部にあり、平面形は直径110cmほどの円形を呈し、住居跡の床面からの深さは72cmで、漏斗状に落ち込んでいる。覆土は概略褐色を呈し、下部からは炭化物が少量検出された。貯蔵穴Bは、南コーナー部に検出され、平面形は長径90cm・短径78cmの楕円形状を呈し、床面は平坦で壁がゆるやかに立ち上がる。

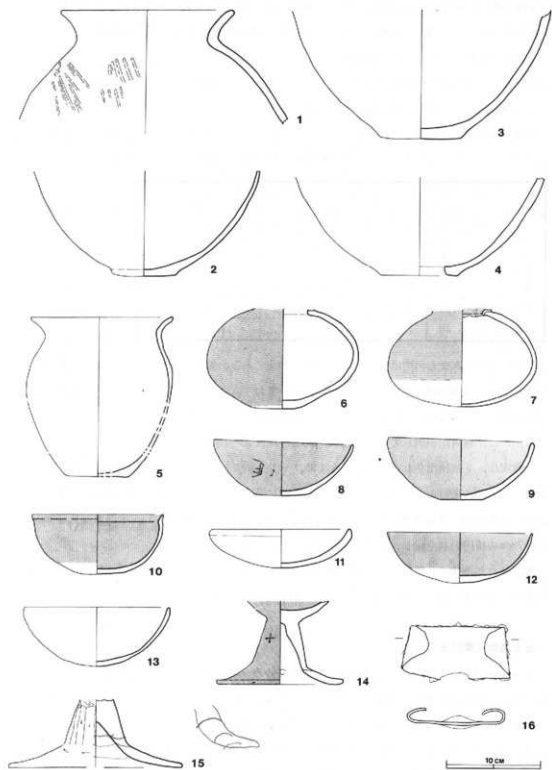
覆土は自然堆積の状態を示し、第1層は黒褐色土が中央部に広く堆積し、第2層より下に行くほどロームを多く含み、焼土及び炭化純子の混入が見られる。

出土遺物 (第22図)

床面のほぼ全面から多くの土師器片が出土している。ことに、東コーナー付近からは、完形・準完形品の出土品が多い。器種としては、環形土器、椀形土器を中心として、壺・埴・高環などの土器が出土している。また、西壁下から「鋤先」と思われる鉄製品が出土した。

1は、北コーナー部から出土した壺形土器の口縁部である。2・3は南コーナー部の床面から出土した壺形土器又は椀形土器の底部であり、いずれも破片で出土している。

4は、東部コーナー近くの床面から出土した椀形土器の底部であり、直径5cmの小孔が穿たれ、



第22图 第5号住居跡出土遺物実測図

胸部の一部は黒化している。

5は、南コーナー付近から破片で出土した小型甕形土器である。口径15.1cm・器高18.0cmで最大径は胴部やや上位にあり15.5cmを測る。胴部は卵形を呈し、頸部からゆるく内彎したあと、短く外上して口唇部にいたる。胴部外面は篋削りによる整形がなされ、口縁部は内・外面ともに横ナデ整形が施されている。色調はにぶい橙色を呈する。

6・7は、口縁部が欠損した埴形土器である。6は西側コーナー床面から出土し、底部が小さな平底となっている。7は丸底で、胴部はともに扁平な球形を呈する。胴部最大径は、6が16.2cm、7が15.8cmであり、ともに赤彩されているが外面は剥落がはげしい。6の外面には少量のサスの付着が見られ、一部は黒化している。胎土は砂粒及び砂礫を若干含んでいる。

8～10は、いずれも赤彩された埴形土器で、東コーナー付近の床面から完形及びつぶれた形で出土した。口径は14.0～15.6cmで、器高は5.7～6.6cmである。8と9は、小さな底部をもち弧をえがいてなめらかに立ち上がり、口縁部でかるく内彎する。体部はナデによって整形され、口縁部は横ナデ整形が施されている。胎土は砂粒及びスコリアを若干含んでおり、薄手で焼成は比較的良好である。10は、一部欠損がみられるが体部が豊かなふくらみをもち、短い口縁部が、多少外反きみとなって体部との間にかかる稜線を残している。色調は暗赤色を呈する。

11～13は、丸底を呈する環形土器で、11・13は東部コーナー付近床面から出土した。12は西側壁下からはほぼ完全な形で出土し、外面が赤彩されている。

14・15は高環形土器の脚部であり、北西壁下炉跡近くから出土した。

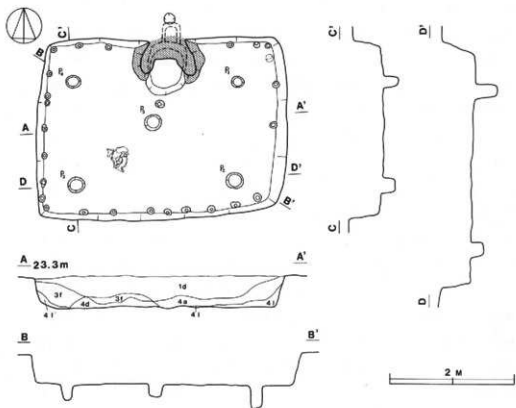
16は、西壁近くの床面から出土した鉄製遺物で「鋸先」と考えられる。全体的に腐蝕がひどいが、ほぼ原形を保っている。形態は、やや末広がり逆台形を呈し、左右から折り曲げられた耳部によって柄に続く木質部をしっかりと固定していたものであろう。この本体部の大きさは、刃先の幅11.6cmで多少ふくらみをもち、柄側の幅10.0cm、長さ5.5cmをはかる。柄側の鉄板の厚さは2.0～2.5mmである。刃先や中央部が欠損し、一部が多少折れ曲がっており、使用の跡を感じさせる。

第6号住居跡（第23図）

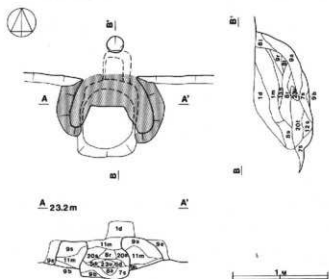
本住居跡は、調査区G3hを中心に確認され、第7号住居跡の南西7mほどに位置する。主軸方向は真北で、規模は長軸4.0m・短軸2.9mほどの隅丸長方形を呈する小型住居跡である。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50cmほどである。床はロームであり、ほぼ平坦で全体的にしまりがある。カマド付近は焼土及び炭化粒子を多く含み、とくに硬くしまっている。

カマドは、住居跡の規模の割には大きめで、北壁中央部に構築されている。遺存度は比較的良好である。煙道部は北壁を40cmほど掘り込んでつくられ、カマドの中心部からゆるやかに立ち上



第23図 第6号住居跡実測図



第24図 第6号住居跡カマド実測図

がり、さらに急傾斜して煙排出口に続く。袖部は粘土混りの山砂で構築されている。燃焼室内部は高热によって赤褐色の焼土ブロック状を呈し、きわめて硬い。

ピットは5個検出された。このうちP₁~P₄は各々対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。直径はそれほど大きなものではなく、深さは22~34cmと比較的浅い。P₅も主柱穴とはほぼ同規模であり、住居跡に伴うものと考えられる。

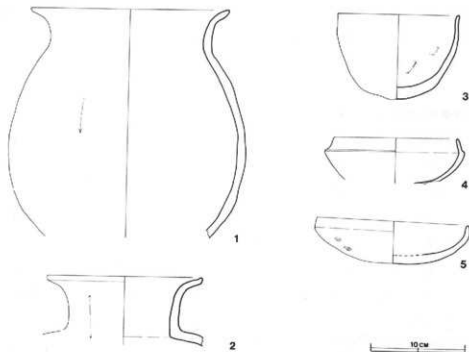
ピット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備 考	ピット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備 考
P ₁	20	18	22	主柱穴	P ₄	24	20	24	主柱穴
P ₂	38	24	34	#	P ₅	28	26	22	
P ₃	28	25	22	#					

壁下からは壁柱
穴が24個検出され
た。間隔は不統一
であるが周回して
いる。直径10cm、

深さ10～15cm程度が多い。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土を主体として床面に近づくにつれて暗褐色土から褐色土へと移行している。

出土遺物 (第25図)



第25図 第6号住居跡出土遺物実測図

坏・鉢・甕形土器等が、床面中央部からカマド付近にかけて出土しているが、数は少ない。

1は、床面中央部からつづれた形で出土した甕形土器で、底部は欠損している。口径は21.0cmで器高は30cm弱と思われる。やや胴長で肩部はあまり張らずに、頸部が短めに立ち上がった後後反して口唇部に至る。内・外面ともに篋ナテ整形が施され、頸部及び口縁部が横ナテ整形となっている。胎土中には砂粒及び砂礫が多く含まれ、焼成はやや軟弱きみである。色調はにぶい暗赤褐色を呈し、煮炊きに使用されたと思われる痕跡がうかがえる。

2は、壺形土器の頸部である。頸部はほぼ垂直に立ち上がって、口縁部と肩部が対称的に外反し、口唇部が多少突出してかゝる稜線が形づくられている。

3は、北東コーナ一部の床面から出土した丸底手捏ねの鉢形土器である。口径13.7cm・器高9.4cmを測る。底部はゆるやかなふくらみをもちながら、急な立ち上がりを見せ、口縁部は多少内彎きみで、口唇部で若干外反する。外面は寛ナテ整形で雑であるが、内面は比較的ていねいである。色調はにぶい褐色で、焼成は多少軟弱である。

4は、床面中央付近から破片で出土した环形土器である。底部は丸底であるが欠損している。体部との接点にわずかな受け部を形づくり、やや短く多少内彎きみに立ち上がる。口径13.0cm・器高5.0cmを測る。底部は内・外面ともに寛ナテによって整形され、体部は横ナテ整形となっている。胎土は粘度が高く、焼成は良好である。色調は内・外面ともににぶい黄褐色を呈する。5は、カマド前面の床面からこわれた形で出土した环形土器で、現存率60%ほどである。器形は4に比べて多少浅く、底部は丸底で皿状を呈している。色調は灰黄褐色を呈し、多少黒化している。口径は16.0cm・器高は4.4cmである。

第7号住居跡(第28図)

本住居跡は、G3位を中心に確認され、第6号住居跡の北東7mほどに位置している。主軸方向は、N-35°-Wで、一辺が5.8mの隅丸方形を呈し、よく整った住居跡である。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁上部の一部が擾乱されて炭化物が多数に出土している。壁高は50cmほどである。床はロームであり、全体的にしまっている。カマド付近は焼土や炭化粒子を含み、とくに硬い。

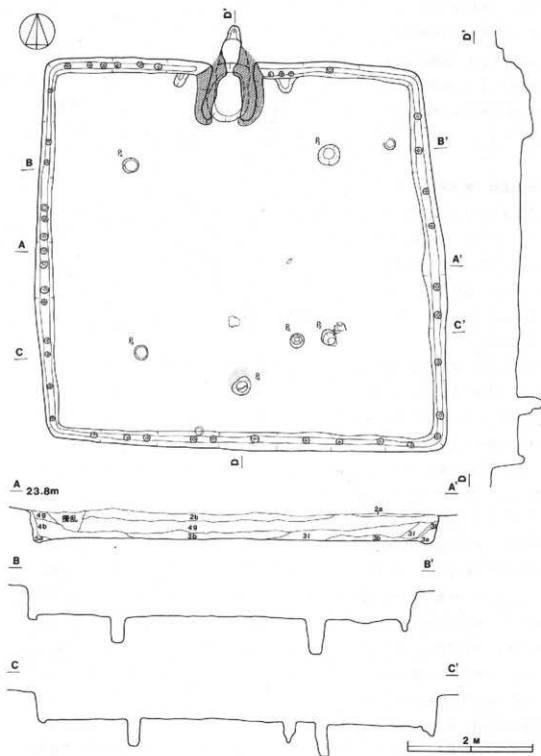
カマドは北壁中央部に構築され、遺存度は良好である。煙道部は北壁を30cmほど掘り込んでつくられ、火床は灰面を10cmほど掘り込んでつくられている。袖部は粘土混りの山砂で構築され、内側は赤褐色の焼土ブロックとなっている。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	32	28	44	主柱穴	P ₂	52	48	52	主柱穴
P ₃	46	38	67	"	P ₄	34	28	57	"

ピットは8個検出された。のうちP₁~P₄は各々対角線上に位置し、

主柱穴と考えられる。P₁とP₄の直径はそれほど大きなものではないが、P₂とP₃の直径は46~52cmと大きく2段に掘り込まれている。深さは44~67cmである。なお、P₃の上部は土壌状になっており、壺1個体が出土している。他は2個が壁下から検出されている。いずれも本住居跡に伴うものと思われる。

壁溝は東壁下及び南西コーナ一部に確認されたが、全周しているわけではない。幅15cm内外・



第26图 第7号住居跡実測图

深さ6～7cm程度である。

覆土は自然堆積の状態を示し、上部が黒褐色土で床面近くは暗褐色を呈するが、各層ともに、微量の炭化粒子及び焼土粒子を含んでいる。

出土遺物 (第20図)

出土量はそれほど多くはないが、カマド付近の床面及びカマド中から完形の土師器が多数出土している。器種としては環形土器を主として、甕形土器・甗形土器が見られる。

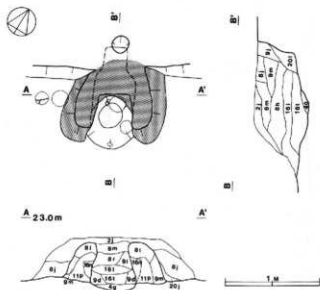
1は、カマド焼き口部から出土した甕形土器である。口径17.7cm・高さ19.2cmを測り、最大径は18.4cmで胴部上位にある。肩部は多少張りきみで、ゆるやかに内彎して頸部を形成したあと、逆に外反して短い口縁部を形づくっている。整形は口縁部がナデ、胴部は横ナデによる。胎土は砂粒及び砂礫を多く含んでにぶい褐色を呈し、胴部は部分的に黒化している。

2は、P₃主柱穴覆土上からつづれた形で出土した甕形土器である。残存率は40%程度である。口径は17cmでやや撫で肩を呈している。

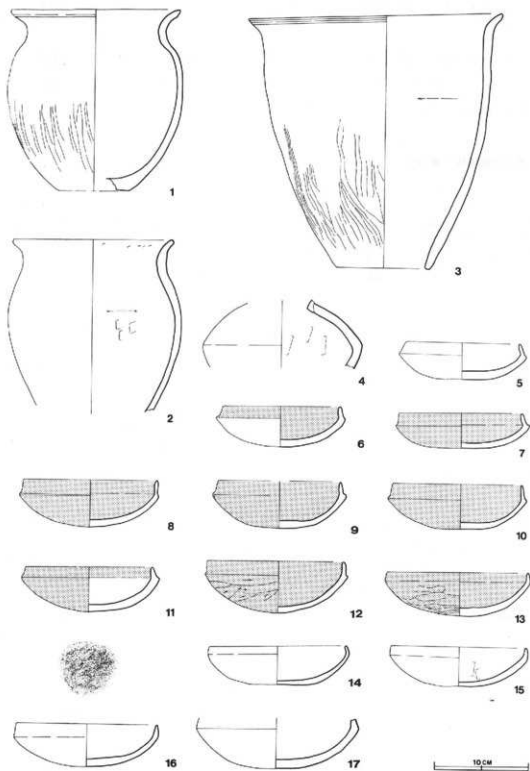
3は、カマド東側北壁下から倒立して出土した、完形の甗形土器である。口径・器高ともに27.0cm、底径9.9cm、底部の孔径8.9cmを測る。胴部は底部から急な立ち上がりをもせて多少のふくらみをもちながら外上し、胴部上位が若干内彎きみになったあと、ゆるく外反して短い口縁部を形づくっている。胴部外面は縦に篋ナデによる整形が施され、口縁部内・外面ともに横ナデ整形が施されている。器内面は滑らかで、甗としての使用のあとが感じられる。胎土は砂粒及び砂礫を多く含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈し、底部を中心に一部が黒化している。

4は、甗形土器で底部と頸部が欠損している。胴部は多少扁平きみで中央部に張りをもつ。

5～17は、環形土器であり、黒色処理が施されているものが目につく。このうち5～7は底部と体部の境目に受け部を有する。口径は12.2～13cm・器高が3.7～4.3cmで、比較的浅い。8～12も受け部を有する環形土器であるが、器高は5cm程度と若干深い。いずれも薄く黒色処理が施されているが、10を除いては剥離が見られる。13～17は、底部と体部との境が「く」の字状に折れ曲がって体部が短く立ち上がり、口唇部に至る。16は浅黄橙色を呈し、17は暗赤色を有する。



第27図 第7号住居跡カマド実測図

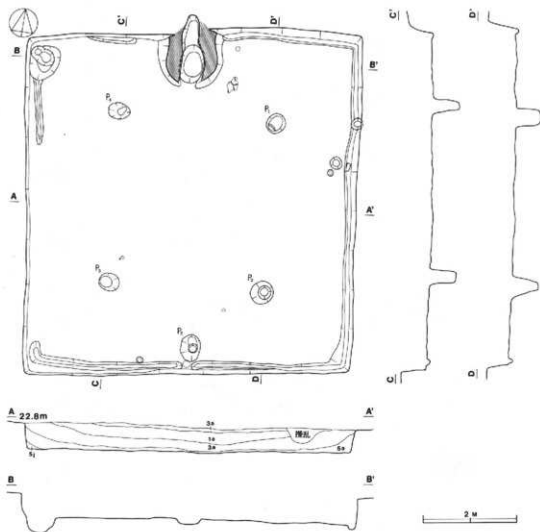


第28图 第7号住居跡出土遺物実測図

これら環形土器は、いずれも胎土に細かい砂粒と若干のスコリアを含んでおり、焼成は比較的良好である。

18は、カマド内から出土した支脚である。上部がすばまった円柱形を呈しているが中間部が多少欠損している。基部径9.0cm、上部径3.5cmを測り、高さは17～18cm内外と思われる。胎土は砂粒を多く含み、レンガ状となっている。

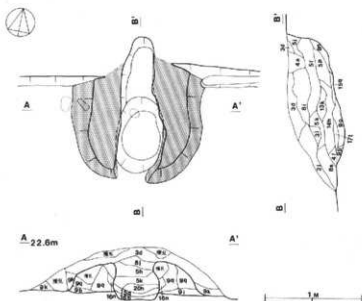
第8号住居跡 (第29図)



第29図 第8号住居跡実測図

本住居跡は、F3h₂を中心に確認され、第7号住居跡の北北西25mほどに位置している。主軸方向はN-8°-Wで、一辺が6.6mの隅丸方形を呈している。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50cm程度である。床はロームであり、全体的にしまっているが、南西及び東側の一部には樹木の根などによる攪乱が見られる。



第30図 第8号住居跡カマド実測図

カマドは北壁中央部に構築されているが、西袖部の一部が攪乱をうけている。標道部は北壁を35cmほど掘り込んでつくられ、火床は床面を10cmほど掘り込んでつくられている。袖部は粘土混りの山砂で構築され、内側は赤褐色の焼土ブロックとなっており極めて硬い。

ピットは5個確認された。P₁~P₄はほぼ対角線上に位置し、主柱穴と考えられ

る。直径42~50cm

であり、深さ53~57cmである。P₁からは少量の粘土が出土し、P₂の掘り

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	42	40	53	主柱穴	P ₄	48	33	57	主柱穴
P ₂	50	48	56	"	P ₅	58	40	44	
P ₃	44	36	56	"					

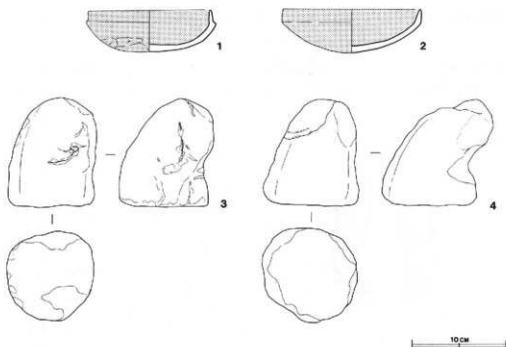
込みは2段になっている。P₅はP₂とP₃の中間で南壁寄りに検出された。主柱穴とはほぼ同規模であり、入り口施設の一部かと推測される。

壁溝は北壁の一部を除いて各壁下に回っている。幅15cm・深さ10cm程度である。

貯蔵穴は北西コーナー部に確認された。長径80cm・短径60cmの楕円形状を呈し、深さ30cmである。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土を主体として床面に近づくにつれて褐色土へと移行する。

出土遺物 (第31図)



第31図 第8号住居跡出土遺物実測図

出土量は極めて少ないが、南壁及び東壁下の床面からはほぼ完形の環形土器が3点ほど出土している。

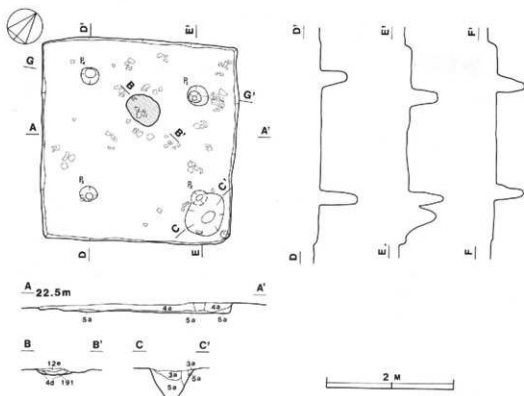
1は、東壁下から出土した環形土器である。口径13.0cm・器高4.5cmを測り、体部と底部との境には受け部を有する。2は、南壁下から出土し、口径14.7cm・器高4.5cmである。いずれも内・外面とも黒色処理が施されている。

3と4は、カマド付近から出土した未使用の支脚である。円筒形にちかく、底部は平らで大きく、上部は丸みをおびて前かがみになったような形をしている。3は、底径9.5cm・高さ11.5cmである。4は、これより若干大きめである。いずれも、山砂と粘土の混合土であり、手捏ねで粗雑なつくりとなっている。色調は黄褐色を呈し、使用前のものと考えられる。

第9号住居跡 (第32図)

本住居跡は、D2j₀を中心に確認され、第10号住居跡の南南西6mに位置している。主軸方向はN-40°-Wで、長軸3.2m・短軸3.1mの隅丸方形を呈する小型住居跡である。

壁はやや開きぎみに立ち上がり、壁高は最も深い北東壁でも15-16cmで、南西壁は極めて浅く、壁が確認できない状態である。床はロームであり、全体的にはしまっているが、木の根等の攪乱もあり、遺存状態はあまりよくない。



第32図 第9号住居跡実測図

炉跡が床中央部のやや北西壁寄りに位置している。長径55cm・短径35cmのほぼ楕円形の地床炉で、床面を12cmほど皿状に掘り込んでいる。炉床は赤褐色に硬く焼け、覆土には焼土が充満している。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	36	30	48	主柱穴	P ₃	30	25	61	主柱穴
P ₂	30	25	56	"	P ₄	30	30	47	"

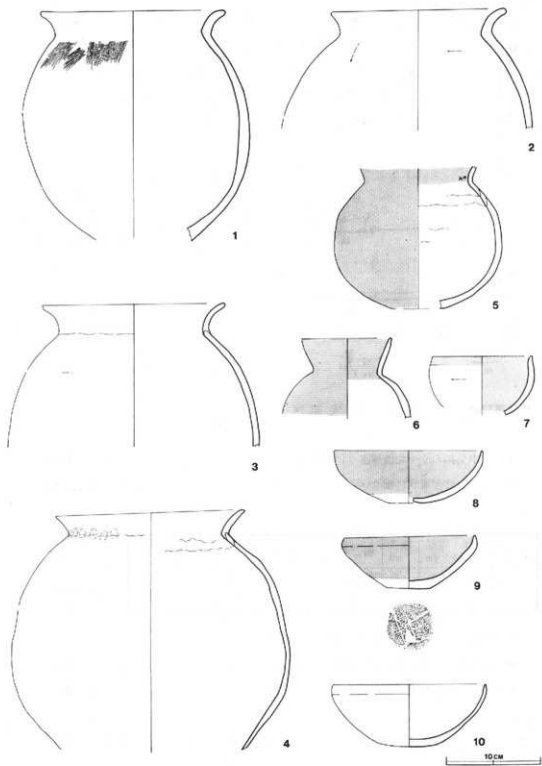
ピットは4個検出された。いずれも対角線上に位置し、主柱穴と考え

られる。直径は30～60cmで、深さは47～61cmである。

貯蔵穴は、東コーナー部に近く主柱穴に接するようにして検出された。長径70cm・短径50cmの小判形を呈し、住居跡床面からの深さは49cmで楕鉢状を呈している。覆土中から土師器片が出土している。

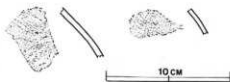
覆土は浅く、攪乱もみられるが、全体として自然堆積の状態を示し、暗褐色土を主体とする。

出土遺物 (第33・34図)



第33图 第9号住居跡出土遺物実測図

床全面から、極めて多数の土師器片が出土している。北西コーナー部から炉跡付近にかけては特に多い。器種としては、環・埴・埴・壺・甕等であるが、ほとんどが破砕されている。時期的には、古墳時代中期に編年されるものと考えられる。



第34図 第9号住居跡出土土器拓影図

1～4は、破砕された形で出土した甕形土器である。1は完存率約60%、2は肩部及び口縁部のみが残存する。いずれも器高は約25cm、胴部は球形を呈し、口縁部は短くやや急な形で外反する。1の胴部上位は刷毛目による整形が見られる。色調は1がにぶい橙色であり、2・3はにぶい灰褐色を呈する。いずれも胎土には砂粒を多く含んでいる。4は南壁下の床面から破砕された形で出土した。1・2より若干大きめであり、底部は欠損している。外面は篋ナデ整形が施され、頸部は輪積みされて、指圧痕を有する。器外面は広い部分に亘って黒化している。

5は、赤彩された丸底の壺形土器で、完存率は約40%である。胴部はほぼ球形を呈し、薄手である。

6は、赤彩された埴形土器であるが、完存率は50%に満たない。口径は約9.5cm程度と思われる。内・外面ともに赤彩されているが剥落がはげしい。胎土は砂粒を多く含み、地肌は浅黄褐色を呈している。

7は、内面と外面上部が赤彩された埴形土器であり、底部が欠損している。口径11.2cm・器高6.2cmで、底部がふくらみをもって外上し、口縁部はやや内彎きみとなっている。色調は内面が暗赤褐色、外面が暗褐色を呈している。

8～10は環形土器である。口径は14.7～16.4cm・器高5.5～6.6cmであり、8と9の底部は平底であり、10はやや丸みをおびている。胎土には砂粒・砂礫を多く含んでおり、焼成は良好である。9は底部に篋描きが施されている。

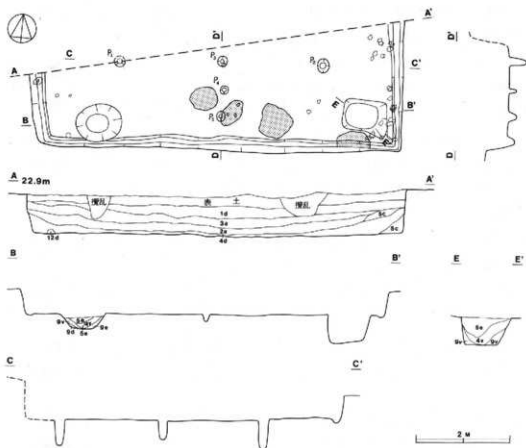
拓影図は、南西側床面から出土した土器片である。薄手で、斜格子文を有し、一部が赤彩されている。弥生式土器の流れを汲み、伝世品ではないかとも考えられる。

第10号住居跡 (第35図)

本住居跡は、D2g0を中心に確認され、第9号住居跡の北北東6mほどに位置している。調査区外との接点に位置するため、住居跡全体の3分の1程度の調査にとどまった。主軸方向はN-5°-Wで、一辺が7.8m程度の隅丸方形を呈するものと思われる。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50cm程度である。床はロームで全体的に硬くしまっている。西壁付近の床面には焼土及び炭化材が多量に堆積しており、遺物の出土量も多い。

ピットは5個確認された。このうちP₁とP₂は支柱穴と思われる。直径はそれほど大きなもの



第35図 第10号住居跡実測図

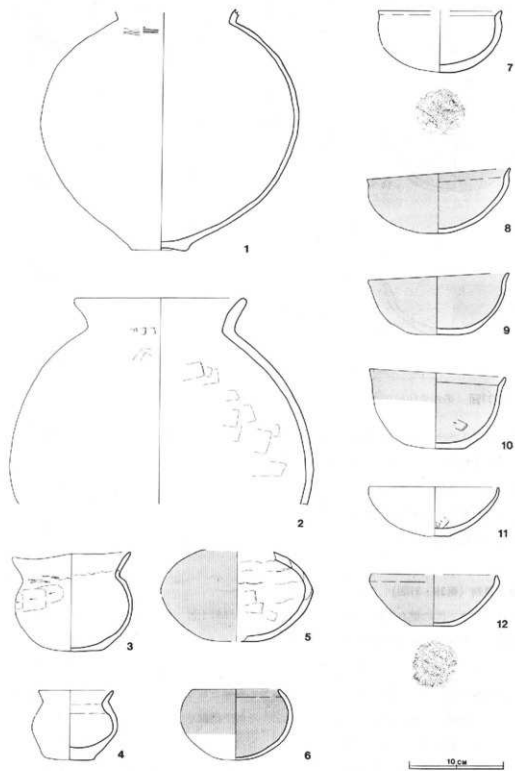
ビット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ビット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P ₁	30	25	60	主柱穴	P ₄	20	20	33	
P ₂	25	25	52	#	P ₅	22	20	20	
P ₃	22	22	40						

ではなく、床面からの深さはそれぞれ52cm・60cmである。P₃~P₅は直径20~23cm・深さ

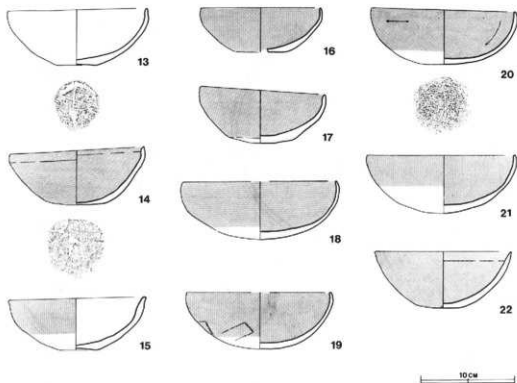
20~40cmであり、西壁中央付近の床面から床中央部に向かって、60cm程度の間隔ではほぼ一直線に並んでいる。間仕切りのための柱穴ではないかと思われる。

壁溝が各壁下を周回している。幅は20~30cm、深さ10cm程度で南壁下の規模がやや大きい。

貯蔵穴は2基検出された。貯蔵穴Aは南西コーナー部にあり、長軸90cm・短軸65cmで方形に近く、深さ60cmで底部はほぼ平坦である。覆土は極暗褐色を呈し、炭化物・焼土を各少量含み、底部近くからは砂粒が出ている。また、覆土中から土師器片はほぼ1個体分が出土している。貯蔵穴Bは西壁下の北西コーナー寄りに検出された。平面形は長径1m・短径0.8mほどのほぼ楕円形



第36图 第10号住居跡出土遺物実測図



第37図 第10号住居跡出土遺物実測図

を呈し、深さ25cmで底部は楕状を呈しながらゆるやかに立ち上がる。覆土は暗褐色土であり、焼土・灰・炭化物を少量を含む。底部近くからは土師器片が出土している。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・極暗褐色土を主体とする。床面近くは暗褐色から褐色を呈し、焼土及び炭化粒子が少量混入している。

床面の状態、遺物の出土状態などから、火災に遭遇したことが考えられる。

出土遺物 (第36・37図)

南西コーナー部の壁直下付近を中心として、多数の環形土器・壺形土器のほか、罎・壺・甕形土器等の完形・準完形品が集中して出土している。

1～4は、小型壺である。3は口径12.1cm・器高10.2cmで胴部はやや扁平な球形状を呈し、頸部には輪積み痕が見られ、胴部は篋削りによる整形が施されている。1は頸部が欠損した壺形土器であり、胴部から底部にかけて球形状を呈し、その下端部を受けるように底部がやや小さく突出している。最大径は27.2cmで胴部中位にあり、器高は約27cmほどである。ていねいなナデによって整形され、色調は暗赤褐色を呈する。2もほぼ同形であるが胴部下が欠損している。4は、口径7.4cm・器高7.5cmほどの小型壺である。器厚は厚く、胴部はかるい篋などで施されているが、

ほとんど未調整にちかい。

5は、頭部が欠損した埴形土器である。外面は赤彩され、胴部中位が特に張っており、ていねいなナデ整形が施されている。

6は、¹⁵盤形土器である。口径9.2cm・器高7.5cmであり、丸底で胴部中位に最大径をもち、ふくらみをもって内彎しながら口唇部にいたる。器厚は薄く、内・外面ともに赤彩されて、底部は黒化している。

7～10は埴形土器であり、いずれも口縁部が外反ぎみとなっている。7・8は丸底で、9・10は小さな平坦面を有して底部としている。これらは、口径13.0～15.2cm・器高6.3～8.0cmを測り、いずれも、口縁部は横ナデ、胴部は寛ナデ又は磨きによって整形されている。7を除いて赤彩され、概ね暗赤褐色を呈する。器外面は剝落がはげしい。

11～22は環形土器で、口径13～15cm・器高5～6cmである。赤彩されたものが10個を数え、底部が平坦面を有するものは9個である。このうち3個が底部に甕描きを有する。底部が球状を呈するものは、18・19・21であり、器厚が比較的薄く、ほとんどが内・外面ともに赤彩されている。いずれの環形土器も底部と体部の境には受け部は有さず、口縁部がかかる内彎ぎみとなっているものが多い。

3. 土 壤

土壌 No	地区	主軸方向	平面形状	底 面	規 模			備 考
					長m	短m	深m	
1	H3c ₂	不 明	不 明	多少凹凸あり	不明	不明	0.66	エリア外にかかる、覆土は黒褐色土で軟弱
2	H3c ₂	N-33°-E	円 形	楕 鉢 状	1.34	1.26	0.52	底部近くから炭化物多量、焼土少量検出
3	H3b _a	N-13°-E	不定形	ほぼ平坦	1.70	0.72	0.20	第4号住居跡主柱穴と複合
4	H3b _a	N-44°-W	不定形	ほぼ平坦	1.40	0.60	0.20	
5	H3b _a	N-48°-W	円 形	楕 鉢 状	1.76	1.54	0.75	底部近くから炭化物多量、焼土少量検出
6	H3a ₃	N-83°-W	楕円形	平 坦	1.27	0.58	0.28	
7	H3a ₃	N-3°-W	方 形	平 坦	4.80	0.94	0.10	
8	G3j ₂	N-28°-W	円 形	平 坦	1.15	1.13	0.29	
9	G3j ₄ '	N-14°-W	円 形	平 坦	1.69	1.54	0.24	
10	G3h ₈	N-14°-E	円 形	皿 状	0.90	0.84	0.22	覆土中に炭化物を少量含む
11	E2b ₀	N-18°-W	円 形	平 坦	3.32	3.00	0.92	ほぼ円筒状

第2表 土 壌 一 覧 表

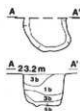
本遺跡で確認された土壌は11基であり、G3・H3区に集中している。ことに、第4号住居跡からは7基の土壌が検出された。土壌の形状については第2表のとおりであり、平面形が円形を呈するものが6基、楕円形を呈するもの1基、方形を呈するもの1基、不定形3基となっている。ここでは、全体的な特徴を記して土壌のまとめとした。

円形を呈する土壌は、第11号土壌を除いて、いずれも直径1m弱のものから2m未満の小土壌である。底部が楕鉢状を呈する土壌は2基、底面が皿状を呈する土壌が2基ある。

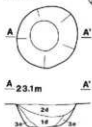
底部が楕鉢状を呈するものは、第2号土壌と第5号土壌であるが、いずれも第4号住居跡に複合し、その床面を切って、さらに50~70cmの深さに達し、地表面からはほぼ100cmの深さにあたる。いずれも、覆土は黒褐色を呈し、底部近くの覆土内からは比較的多くの炭化物が出土し、さらに、少量の焼土が底部にはりつくようにして検出された。かなり古いものと思われるが、第4号住居跡よりは新しいものである。使用目的は明らかではない。第5号住居跡の貯蔵穴Aに比定される土壌もこれと類似する点が多い。

平面形が楕円形を呈するものは第6号土壌であり、第4号住居跡の貯蔵穴Aと複合して検出さ

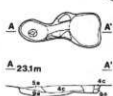
SK001



SK002



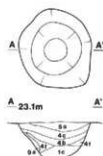
SK003



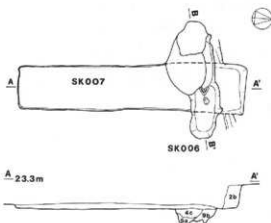
SK004



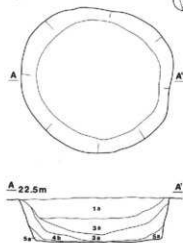
SK005



23.3m



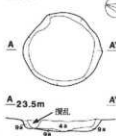
SK011



SK008



SK009



SK010



2 M

图38 土壤实测图

れた。底部はほぼ平坦であり、覆土は極暗褐色土で遺物は出土していない。第4号住居跡の貯蔵穴としての用をなしたことも考えられる。

平面形が方形を呈する土壌は第7号土壌であり、第4号住居跡床面及び貯蔵穴を切り込んで検出された。覆土は暗褐色土で、ロームブロックが多く混入し、軟弱で人為的な埋めもどしも考えられる。遺物の出土はなく、時期は新しいものと思われる。

平面形が不定形の土壌は第3・4号土壌である。覆土は暗褐色土で、遺物はなく、時期・使用目的は不明である。

際立って大きい土壌は、第11号土壌であり、他の土壌から離れて第9号住居跡わきに検出された。上面径3m余りで円筒形を呈し、壁はほぼ垂直で、底部は平坦である。覆土は極暗褐色土を主体としており、遺物は見られない。覆土などから判断してそれほど新しいものとは考えられないが、住居跡より古いものとも思われぬ。使用目的については不明である。

第1号土壌は、調査区の境界にかかり、地表面からは110cmほど下がっている。遺物の出土はなく、覆土中にはロームブロックが多量に混入しており、人為的な埋めもどしの可能性がある。

第2節 高山古墳群

1. 第1号墳

現状

本古墳は標高22mほどの松林の中であり、現在は下草の茂るにまかせている。墳丘部はゆるく、一見小円墳に見え、墳頂部と思われるところは、広い部分にわたる攪乱によって、やや影がくずれ、樹木の抜根もしくは盗掘のあとを感じさせて傾斜面へと続いている。

墳丘の北側はほぼ平坦であり、東側は平坦面からゆるやかな傾斜面へと続き、周溝の形跡は感じられない。西側は台地からの傾斜面がゆるく入り込むような形で、周溝部の存在の可能性を暗示させている。南側はゆるい傾斜面で、墳丘部の延長部が盛り上がって途中まで続き、しだいになだらかになって台地の裾部へと続いている。

外形は、長径約18m、短径約16m、平坦面からの高さ約1.2m、北北西に軸をもつやや長円形の古墳に感じられる。

トレンチの設定

トレンチは、調査エリアの境界線にそってほぼ南北に1・2号墳を貫き、しかも1号墳の見かけの墳頂部を通るAトレンチと、同じく見かけの墳頂部を通りAトレンチと直交するBトレンチとを設定した。いずれもトレンチ幅を2mとし、旧表土下ローム面まで掘り下げ、本古墳の規模及び周溝の確認、盛土の状況観察を行った。

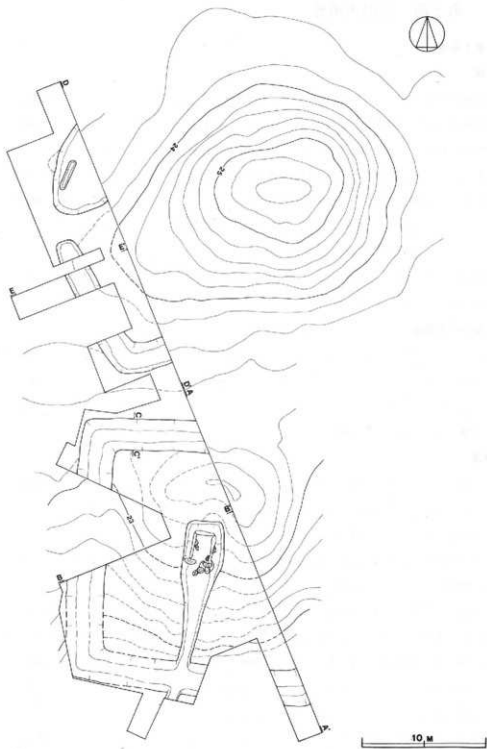
周溝

A・Bトレンチ発掘の結果、墳丘部をはさむAトレンチの両端及びBトレンチの西端部から黒褐色土が幅各3m程度に亘って検出され、これが周溝であることを確認した。

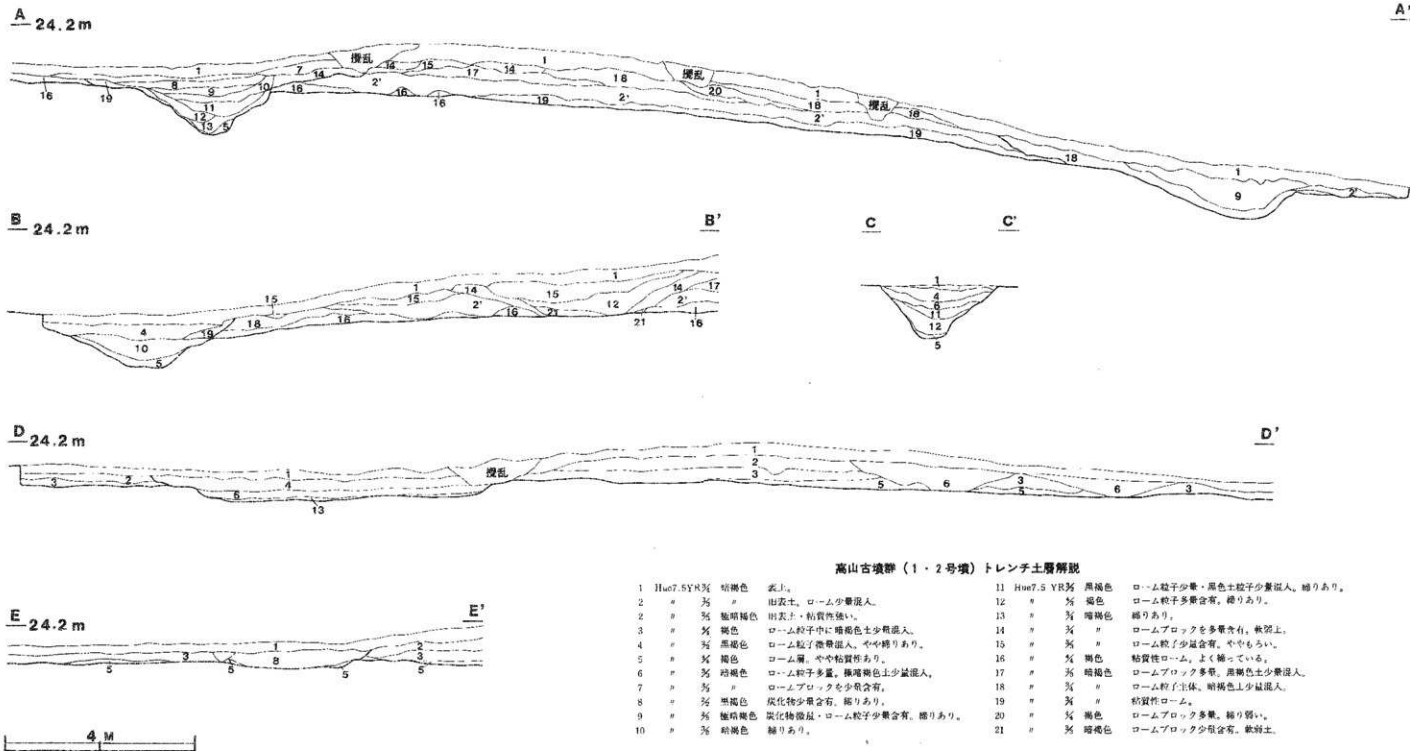
さらに、周溝の広がりを確認するため、A・Bトレンチの間にC・Dトレンチを掘り、調査エリア外の東側を除いて、部分的に周溝の表土を除去した。その結果、周溝は墳丘をかこむように方形に周回していることが判明した。

掘り込みの結果、周溝の規模は、墳丘北側のAトレンチで上面幅約3.5m、底面幅約0.7m、検出面からの深さ約1.1mであり、墳丘部南側の同トレンチで上面幅約3.9m、検出面からの深さ約1.5mであった。断面形状は墳丘部の北から西側にかけてはほぼ逆台形を呈し、南斜面では底部がゆるい腕状となっている。壁の立ち上がりは墳丘側ではゆるく、外側は急である。それが、明瞭に墓域を強調するように、ほぼ正方形に墳丘を周回している。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土を主体として底部になるにしたがって暗褐色土から褐色土へと移行している。底部はほぼ平坦でしまっている。



第39图 第1・2号墳全体図



第40図 墳丘及び周溝の土層断面図

墳丘

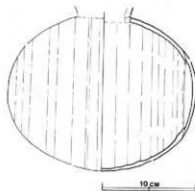
墳丘は、30～40cmの暗褐色の表土の下にローム粒子を含む土層やロームブロックを少量含むややもろい暗褐色土が、小さなブロック状をなして広がり、さらに、極暗褐色土や黒褐色土が混入するややしまった土層が堆積し、比較的变化に富み、人為的に盛土されたことを知る。これらの土層の下には、やや粘性の強い黒褐色土が30～40cmの幅で周溝部付近まで続いており、これが旧表土であることがわかる。さらに、この下には褐色のローム層が広がっている。Aトレンチにおける見かけの墳頂部から旧表土上面まで約80cm、旧表土下ローム上面まで約110cmである。ただし、Aトレンチは本来の墳頂部からはかなり北東にずれており、墳頂部は大きく攪乱を受けており、本来の墳丘の高さを求めることはできない。なお、墳頂部付近の攪乱は、後に主体部まで続いていることが確認された。

これらの結果、本古墳は、墳丘部の一辺が約16.5mで、その外側に約3mの周溝を有する「方墳」であることが判明した。

主体部の位置の確認と掘り込み

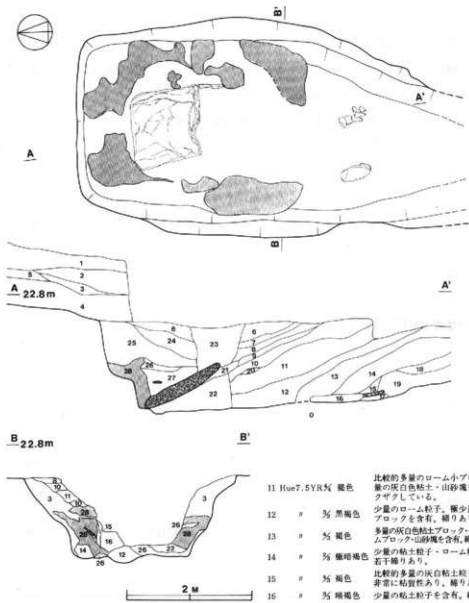
Aトレンチ中央部の盛土中から多量のロームブロック及び粘土ブロックが確認されたため、3区（南西墳丘部）の盛土を除去して、その広がりを確認した。その結果、墳丘のほぼ中央付近に、さらに多くの山砂混りの粘土ブロックが検出された。また、付近に大きな土塊状の落ち込みがあることが確認された。主体部の掘り方であると推測される。

周囲から「横瓶」と思われる須恵器片約2個体分と多くのバラス状の片麻岩が出土している。このため、この土塊部に主体部が存在することを想定して調査を開始した。



第41図 第1号墳出土遺物実測図

土層確認のため、西側に土層セクションラインをとり、この西半分から掘り込んだ。粘土混りの土層を追いながら暗褐色土を除去していく。土層は暗褐色土、極暗褐色土を主体として粘土ブロックを極めて多量に含む。それが上下2層になって中央部に向かって斜めに落ち込んでいる。バラス状の片麻岩が多量に出土する。掘り込み面から3mほど中央部へ向かって斜めに掘り進んだところ、掘り込み面（旧表土下ローム上面）から約60cmの深さの地点から片麻岩の板石の上部が1枚傾斜して出土した。板石はほぼ方形を呈し、高さ133cm・幅120cm・厚さ10～20cmほどである。壁側には粘土が多量にはりついている。これらのことから、本古墳の主体部は横穴式石室の構造を有するもので、大きな板石は奥壁石と推測された。また、南周溝へと続く落ち込みは墓道と思われる。

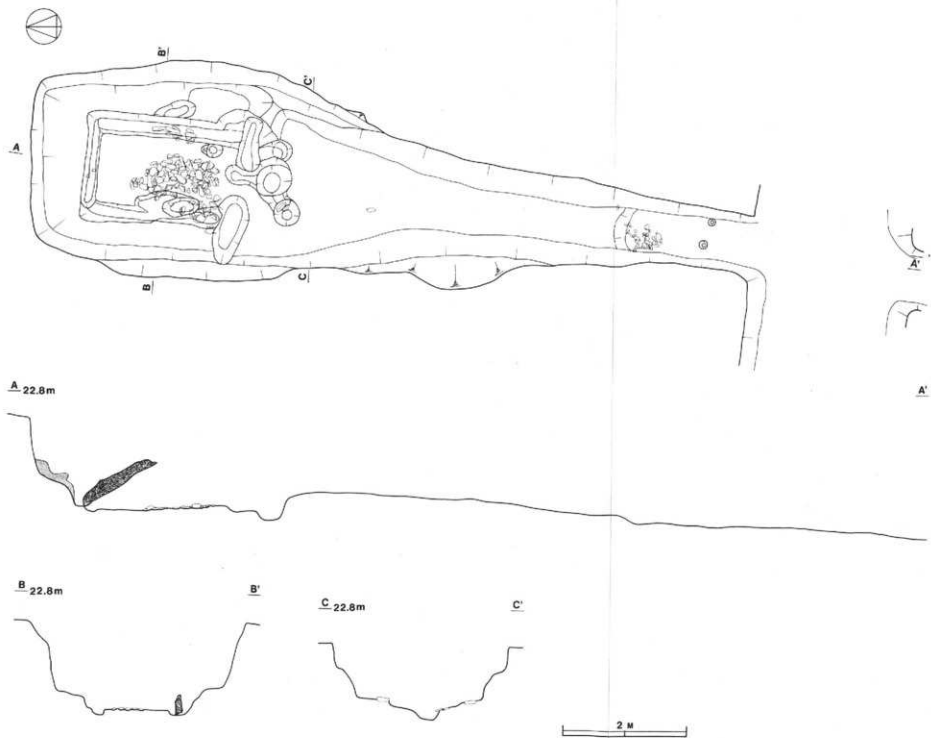


第1号墳主体部土層解説

- | | | | | |
|----|-------------|------|------|------------------------------------|
| 1 | Hue7.5YR5/6 | 極暗褐色 | 表土。 | |
| 2 | # | 3/6 | 暗褐色 | やや締りなし。 |
| 3 | # | 3/6 | # | ロームブロック少量含有。 |
| 4 | # | 3/6 | 黒褐色 | 田表土。 |
| 5 | # | 3/6 | 褐色 | 多量のロームブロックを含有、ゴツゴツしている。 |
| 6 | # | 3/6 | 暗褐色 | 比較的多量のローム粒子含有、若干締りあり。 |
| 7 | # | 3/6 | 黒褐色 | 少量のローム粒子含有、締りあり。 |
| 8 | # | 3/6 | 褐色 | 少量の灰白粘土粒子・ローム粒子を含有、締りあり。 |
| 9 | # | 3/6 | 極暗褐色 | 若干粘質性あり。 |
| 10 | # | 3/6 | 褐色 | 比較的多量の灰白色粘土ブロック・少量の山砂塊を含有、非常に締りあり。 |

- | | | | | |
|----|-------------|-----|--|--------------------------------------|
| 11 | Hue7.5YR5/6 | 褐色 | 比較的多量のローム小ブロック・少量の灰白色粘土・山砂塊を含有、サクサクしている。 | |
| 12 | # | 3/6 | 黒褐色 | 少量のローム粒子、極少量の粘土小ブロックを含有、締りあり。 |
| 13 | # | 3/6 | 褐色 | 多量の灰白色粘土ブロック・少量のロームブロック・山砂塊を含有、締りあり。 |
| 14 | # | 3/6 | 極暗褐色 | 少量の粘土粒子・ローム粒子を含有、若干締りあり。 |
| 15 | # | 3/6 | 褐色 | 比較的多量の灰白粘土粒子を含有、非常に粘質性あり、締りあり。 |
| 16 | # | 3/6 | 暗褐色 | 少量の粘土粒子を含有、締りあり。 |
| 17 | # | 3/6 | 褐色 | ソフトローム。 |
| 18 | # | 3/6 | 暗褐色 | 極少量の粘土粒子を含有、若干締りあり。 |
| 19 | # | 3/6 | 黒褐色 | 極少量のローム塊粒子を含有、サクサクしている。 |
| 20 | # | 3/6 | 暗褐色 | 少量のローム粒子を含有、粘質性あり。 |
| 21 | # | 3/6 | 褐色 | 極少量の粘土粒子を含有、締りあり。 |
| 22 | # | 3/6 | # | 少量の粘土粒子を含有、締りあり。 |
| 23 | # | 3/6 | # | 軟弱土。(掘乱) |
| 24 | # | 3/6 | # | 多量のローム粒子を含有、非常に締りあり。 |
| 25 | # | 3/6 | # | 比較的多量のローム小ブロックを含有、軟弱土。 |
| 26 | # | 3/6 | 暗褐色 | 少量の粘土粒子・ローム小ブロックを含有、締りあり。 |
| 27 | # | 3/6 | # | 少量の粘土ブロックを含有、サクサクしている。 |
| 28 | # | 3/6 | 明暗灰色 | 粘土ブロック層。 |

第42図 第1号墳主体部実測図



第43图 第1号墳主体部掘り方実測図

石室の掘り方

掘り方は、玄室部でほぼ隅丸長方形に近く、それが羨道部ですばまりながら墓道へと続いている。規模は全長約4.4m（羨道部まで）、最大上面幅3.5m・底面幅2.8m、玄室床面から真上の墳丘面までの深さ約2.5m、羨道部で1.3～1.4mである。床面は玄室部が最も深く平坦で、羨道部はゆるやかに上がりながら羨門部へと続く。壁面はロームで、玄室部は急で垂直に近く、羨道部ではややゆるやかに、いずれも2段に掘り込まれている。

玄室

掘り方床面のやや壁寄りから、浅い溝状の落ち込みが確認された。奥行約2.2m・幅約1.2m・上面幅約30cm・深さ約8cmで方形に周回しており、これが、玄室の位置及び規模を示すものと考えられる。底部はロームで硬くしまっており、奥の**一辺には前出の奥壁石の底部が位置していたものである**。玄室入り口から奥に向かって右壁底部から、片麻岩の小板石が一枚、立った状態で出土した。側壁石を形づくっていたものの一部と思われる。入り口中央部には溝らしいものは認められず、その左右各80cm程度にわたって掘り方を一部掘り込むような形で浅い溝がえぐられている。これは袖石が置かれた位置と思われる。しかし側壁・袖部を構成する部分に板石はなく、盗掘にあった可能性が考えられる。掘り方とのすき間には極めて多量の粘土が出土している。おそらく各壁は、2～3枚の側石によって構築され、玄門部には左右1枚ずつの袖石が使われ、さらに平常は入り口部を幅60～70cm程度の閉塞石で閉ざしていたと推測される。これらの奥壁石、側石、袖石はコーナー部及び接点部を中心に多量の粘土によって裏打ちされ、掘り方とのすき間には、掘り上げられた土と、石室を構成した時の残石・バラスを敷き込んで、玄室の四壁を固定したと思われる。底部は平坦で、よくしまったローム上に、バラス状の小石が入り口部を中心にして比較的密に敷かれている。遺物は全く出土していない。天井部については、形成していたと考えられる素材等の資料は全くなく、板石を使用したものか、木材を利用したものかは不明である。

この玄室内に遺体がどのような形で安置されたものか、単体なのか、複数なのか、それとも埋葬に至らないままに終わってしまったものか、人骨も遺品も全く出土を見ない現在、ただ推測にたよるだけである。さらに、玄室を形成していたはずの側石や袖石がどうしてなくなっているのか。「昭和31年に盗掘を受け、鉄刀が出土した」という記録も、木調査結果からそれを裏付けるに足る**事実**は確認できなかった。^(注)（注）『谷田部の歴史』（昭和50年9月15日発行）による。

羨道

羨道は、やや明瞭さに欠けるが、玄室の前面に奥行1.0m・幅約2.30mで認められる。奥行は浅く両壁はロームで、急な立ち上がりを示している。底部は墓道に向かってゆるやかな上り斜面となり、ごくまばらではあるがバラス状の小石も見られる。玄門付近には直径50cmほどの小土壙が

見られるが攪乱と考えられる。羨道天井部の高さは、真上の墳丘面までの高さが1.3m内外であることから推測する外はない。

この部分を羨道として明確にとらえてよいものか否かは難しいところである。しかし、玄門と思われる位置から墓道に向かって約2mの掘り方底部の両側、同一レベルからほぼ対称に各1基ずつの小ぶりな板石（玄室に向かって右側の石は風化している）が出土しており、これが羨門跡と推定される。また、玄室から続く土層の流れは、粘土を極めて多く含む層が上下2段となって、前記の羨門跡と思われる板石部分で盛土上部に接して消滅している。この部分まで封土があったと思われるのである。羨門の開口部は前記の敷石の状態から考えて、幅約1.2m程度と考えられる。

墓道

羨道から続く墓道は南へ直線的に延びる。検出面での上面幅約1.5m・底面幅60～70cmで墳丘上面までの深さは羨道部側で約1.2mを測る。傾斜に沿って次第に浅くなり、南側溝部を同一レベルで横切って台地裾部へと続く。壁はロームで急な立ち上がりを見せており、底面にはまばらながら、バラ状の小石が敷かれている。断面形はやや開いたU字状を呈している。

2. 第2号墳

2号墳は、1号墳のすぐ北側の平坦部に築かれ、外形が長円形のゆるやかな墳丘を有する古墳である。

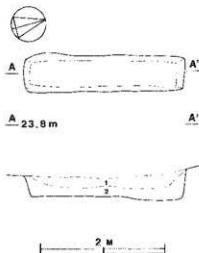
今回は、道路予定敷内の調査という関係から、墳丘裾部のごく一部と、それに続く周溝のみの調査にとどまった。

墳丘

墳丘は、主軸方向を東北東にとり、墳頂部の高さ約2.0m・全長約28m・最大幅約20mの規模を有する。墳頂部は、ほぼ主軸線上にあり、やや北東に偏して位置する。墳丘は北側を中心に北東及び南東部で比較的急な傾斜を示し、西側の傾斜面はゆるやかで、この傾斜面上に攪乱と思われる大きな落ち込みがみられる。この下からは、大きな板石らしきものも確認されており、主体部の存在を暗示している。

周溝

西側のごく一部だけの調査ではあるが、南西部から幅約2.5m・深さ0.4mの規模で検出された。これが、ほぼ鍵の手にまわり、幅1.8mのブリッジ状の切れ目を



第44図 第2号墳周溝内土壌実測図

はきんで幅約4m・深さ約0.6mの広く浅い周溝が北東へとカーブしながら続いている。これが墳丘をほぼ相似形にとりまいているものと想像される。

墳丘及び周溝の状態などから、この古墳は帆立貝式の古墳と推定される。

周溝内土壌

北西周溝内のやや外側に近い底面から検出された。長さ2.6m・幅0.6m・深さ0.4mでほぼ長方形を呈する。覆土は、暗褐色で遺物の出土はなく、この古墳に関係があるものか否かは不明である。

第4章 ま と め

1. ツバタ遺跡

ツバタ遺跡において確認された遺構は、住居跡10軒、土壇11基である。調査面積に比べると、遺構数は比較的少ないといえる。遺物は、ほとんどが土師器であり、土器型式などから判断すると、古墳時代中期に編年される住居跡が1軒、古墳時代後期に編年される住居跡が9軒と考えられる。今回の調査は、道路予定路線内という限定があり、集落全体を把握することはできないが、台地縁辺部の平坦面を主な生活基盤として存在した、古墳時代前期から後期にかけての集落跡と考えられる。

(1) 古墳時代中期の住居跡

検出された10軒の住居跡のうち、第9号住居跡は古墳時代中期に編年することができる。他住居跡と比べて、掘込み面が極めて浅く、規模が小さく、炉跡を有し、古墳時代中期に編年される遺物を主体として出土している。この時期の住居跡は、今回の調査区内からは1軒だけしか検出されなかったため、集落の分布状況等について述べることはできないが、少なくとも、この東側に一つの集落が形成されていたと考えられる。

(2) 古墳時代後期の住居跡

古墳時代後期に編年される住居跡は、第9号住居跡を除く9軒である。調査区南側に8軒が、これより北側に離れて1軒が検出されている。集落跡としては、2群に分かれて、それぞれが小集団を形成していたことが考えられる。

住居跡は、北から北西にかけて主軸をとるものが多い。

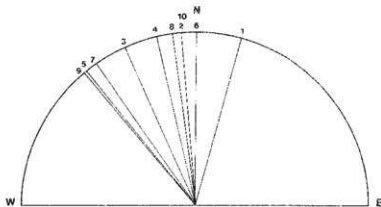
住居跡の規模からみると、最大のもは、第4号住居跡と第5号住居跡であり、いずれも、1辺が9mほどの隅丸方形を呈する。最小のもは、第6号住居跡であり、長辺4.0m・短辺2.9mの隅丸長方形の住居跡である。規模的には、かなり差異のある住居跡が混在する集落跡である。

住居跡の構造をみると、第5号住居跡だけが「炉」を有し、和泉期の特徴を有する土器も若干出土していることなどから、古墳時代中期末から後期前半に編年されるものと考えられる。このほかの住居跡は、「カマド」を有し、鬼高期の特徴を有する土器群を出土し、古墳時代後期に編年されるものである。カマドは、北壁中央付近から検出され、遺存状態は比較的良好なものが多い。カマド内またはカマド付近からは、30～50cmのほし型円錐形状の焼けた粘土塊も出土しており、「支脚」として、煮炊き用の器物を架けるために使用されたものと考えられる。それぞれの住居跡には、支柱穴が4個ある。第1・2・3・8号住居跡には、南壁側2支柱穴間に、カマドと正対するようにして、各1個の柱穴状のピットがある。この付近からカマド前

第3表 ツバタ遺跡住居跡一覧表

番号	主軸方向	平面形	規模(m)	壁高(m)	壁	ト	貯蔵穴	竈	カマド	ヒット	火災	備考
1	N-15° E	隅丸方形	5.0×4.8	20~35	壁	溝	1		1	8		
2	N-5° W	隅丸方形	6.3×6.2	40~45	壁溝・壁柱穴				1	5		
3	N-24° W	隅丸方形	5.9×5.8	45~55	壁溝・壁柱穴				1	5		
4	N-13° W	隅丸方形	9.0× ?	40~60	壁溝・壁柱穴	1(2)			1(2)	7		エリア外にかかる。 ()内はつけかえ。 古墳時代中期末~ 後期。
5	N-39° W	隅丸方形	9.0×9.0	30~50	壁	溝	2	1				
6	N-0°	隅丸長方形	4.0×2.9	約50	壁	柱穴			1	5		
7	N-35° W	隅丸方形	5.8×5.8	約50	壁	溝						
8	N-8° W	隅丸方形	6.6×6.6	約50	壁	溝	1					
9	N-40° W	隅丸方形	3.2×3.1	0~16			1	1		4		古墳時代中期。
10	N-5° W	隅丸方形	7.8× ?	約50	壁	溝	1		不明	5	○	東側がエリア外にかかる。

※ 火災の項は、火災に遭遇したものを○印で記す。



第45図 ツバタ遺跡住居跡主軸方向表

庭部にかけては、特に踏みしめられた感があり、入り口部を構成する施設の一部ではないかとも推測される。第4号住居跡には、4個の主柱穴の他に、棟持柱跡と思われる柱穴も見られる。また、第10号住居跡には、間仕切り用と推測される小柱穴も見られる。貯蔵穴を有する住居跡は、第1・4・10号住居跡である。第4号住居跡はカマドわきに、他はカマドと離れたコーナー一部に、1または2基存在する。第6号住居跡を除いて、各住居跡から壁溝が確認されている。壁柱穴も、ほとんどの住居跡で確認され、それぞれ、家内の湿気防止と土止め等の役割りを果たしていたものと推測される。

住居跡の深さは、40~60cmであり、第1号住居跡と、若干古いと思われる第5号住居跡が多

少浅いほかは、ほぼ平均した深さとなっており、いずれも、各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

第10号住居跡からは、赤彩された遺物が多数出土した。床面から多量の炭化物と焼土が検出され、火災に遭遇したものと考えられる。

第4表 ツバタ遺跡住居跡別出土遺物

遺物	土 器															黒色 処理		
住居跡	坏	埴	鉢	埴	埴	高环	器台	高台付 皿	壺	甕	甕	土玉	支脚	环	埴	埴	壺	坏
第1号									3	6				2				2
2号	8	1					1		2	3			1					7
3号	8					1				6			1					3
4号	4							2	3	10	1	2	1					1
5号	12			2		1			2	3	1		2	3	3			
6号	3		1						1	1								
7号	1			1						2	1		1					13
8号	1									1								2
9号	3			1					1	5					1	1	1	
10号	12	7		2	1				3	4				1	1	1		

各住居跡内からの出土遺物としては、坏・埴・埴・高环・高台付坏・壺・甕・甕等の土師器が見られるが、数量的には坏形土器が最も多く、甕形土器が多いのも目につく。坏形土器の中には、赤彩されたもの、比較的粗雑に黒色処理を施されたものが数多く見受けられる。このほか、第4号住居跡からは土玉が、第5号住居跡からは「鋤先」と思われる鉄製の遺物が出土しており、当時の漁具や農具の一端をうかがい知ることができる。ことに鋤先の出土からは、当時の農耕が水田耕作だけでなく、畑作も進展していたであろうことが推測できる。ただ、このような鉄製農具の出土数が本遺跡で1点のみという出土状況から、当時の鉄製農具の普及がどの程度まで進んでいたものか、また、本遺跡の住居跡が規模的にみてかなりの差異があることなども考え合わせ、集落がどのような構成になっていたものか、今後の調査にゆだねたい。

2. 高山古墳群

今回の発掘調査では、17基から成る高山古墳群のうちの2基を調査したわけである。これらは、高山中学校の東側に、8基をもって1グループを構成しているものである。ここでは、2基の占

墳の調査結果の概略をまとめ、若干の問題点を提示してみたい。

まず、2号墳は、全長約28m、高さ約2.8mで、その外側に3～4m幅の周溝を有する「帆立貝式古墳」であることが確認された。前方部の周溝の一部には、ブリッジ状遺構を有し、墓参道の役割を果たしていたものと推測される。

1号墳は、墳丘の外側に明瞭な周溝を有する「方墳」であり、既に盗掘されていたものである。墳丘は小規模なものであるが、台地先端部から傾斜面にかけて南側の低地を見下ろすような位置に築造され、遠望した時の効果を大にしている。主体部は、墳頂部のはば真下に位置し、地下式の横穴式石室を有するもので、既に、盗掘の被害を受けている。玄室を形成する板石は、奥壁石1枚だけの出土であるが、底部の状況等から、箱形にちかい小規模な石室であったことが判明した。玄室に続く羨道は極めて短く、墓道が周溝を横切って墳丘外まで続いている。玄室の構造について、隅石・袖石が存在したと推測されるほかは想像の域を出ない。

主体部からの出土遺物は、1枚の奥壁石の多量の粘土及びパラス状の石片のみである。奥壁石は片麻岩で、筑波大学の平沢付近から出土する岩石と同質のものと思われる。被葬者を想定し得る遺物は出土していない。

この古墳の形成時期について、筑波大学の岩崎卓也助教授は、形態がよく整った「方墳」であること、「横穴式石室」を有することなどから、茨城県から千葉県北部にかけて多く分布する「変則的古墳」と共通する時期に形成されたものと推測し、古墳時代終末期に近い時期に築造されたものと想定している。また、被葬者層としては、付近の「ムラ」の「有力家父長」の墓であろうと推測している。古墳を築造できる家父長層が、高床式の住居に住む階層なのか、竪穴式住居に住んでいた有力者が古墳を築造し得たものかについては、今後、当時の「ムラ」の分析を続けていくことによって解明への道が開かれるものと考えられる。

図 版

ツ バ タ 遺 跡



遺跡遠景



調査前遺跡全景



終了時遺跡全景（北区）



終了時遺跡全景（南区）



作業風景（表土除去）

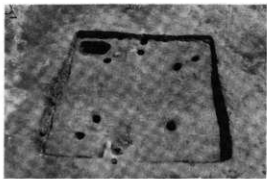


作業風景（遺構掘り込み）

PL 2



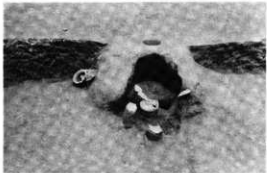
作業風景 (実測)



第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土況



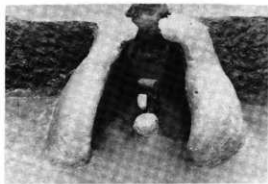
第1号住居跡カマド



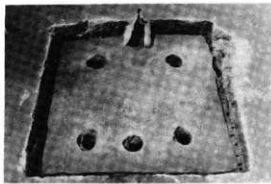
第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



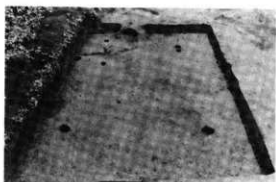
第2号住居跡カマド



第3号住居跡



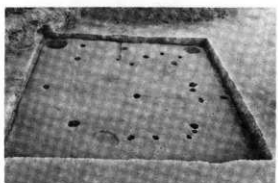
第3号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡

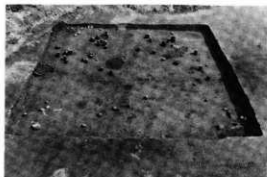


第4号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡

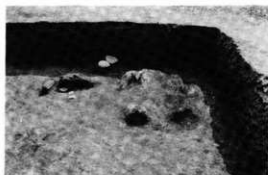
PL 4



第 5 号住居跡遺物出土状況



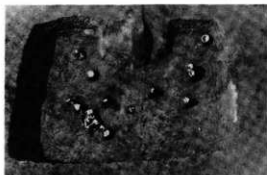
第 5 号住居跡遺物出土状況



第 5 号住居跡遺物出土状況



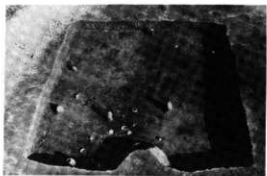
第 6 号住居跡



第 6 号住居跡遺物出土状況



第 7 号住居跡



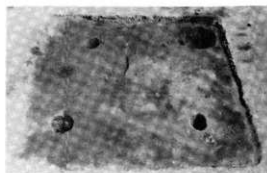
第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡遺物出土状況



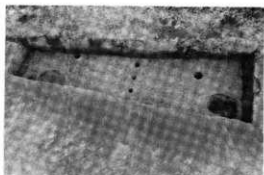
第8号住居跡



第9号住居跡



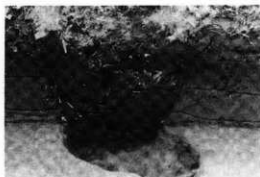
第9号住居跡遺物出土状況



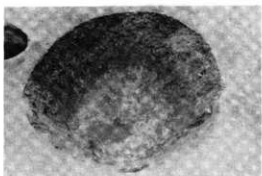
第10号住居跡



第10号住居跡遺物出土状況



第1号土塊



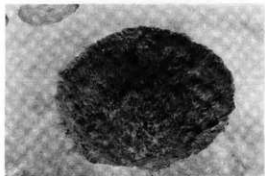
第2号土塊



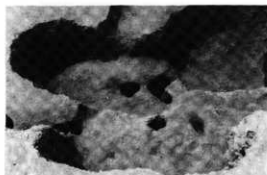
第3号土塊



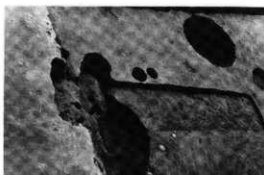
第4号土塊



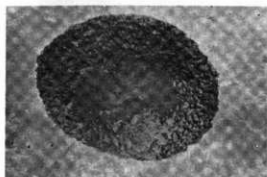
第5号土塊



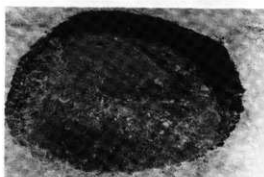
第 6 号土壤



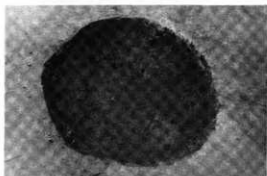
第 7 号土壤



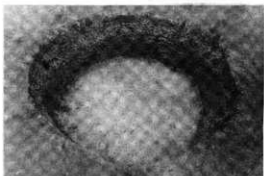
第 8 号土壤



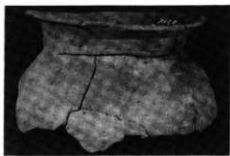
第 9 号土壤



第 10 号土壤



第 11 号土壤



SI 1-1



SI 1-3



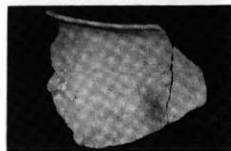
SI 1-2



SI 1-5



SI 1-4



SI 2-1



SI 2-2



SI 2-3



SI 2-4



SI 2-5



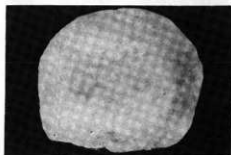
SI 2-6



SI 2-7



SI 2-8



SI 3-1



SI 3-2



SI 3-3



SI 3-4

PL10



SI 3-5



SI 3-6



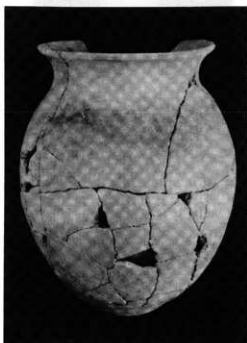
SI 4-1



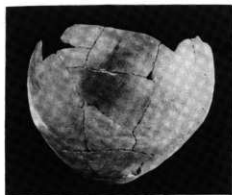
SI 4-3



SI 4-2



SI 4-4



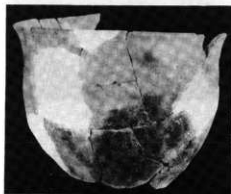
SI 4-5



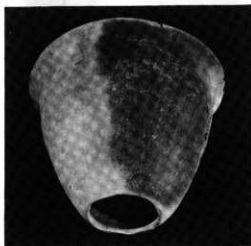
SI 4-6



SI 4-7



SI 4-8



SI 4-10



SI 4-9



SI 4-11



S I 4-12



S I 4-13



S I 4-14



S I 4-15



S I 4-16



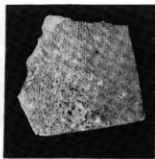
S I 4-17



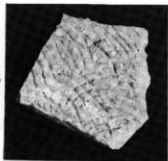
S I 4-18



S I 4-19



SI 4-20 (表)



(裏)



SI 5-1



SI 5-2



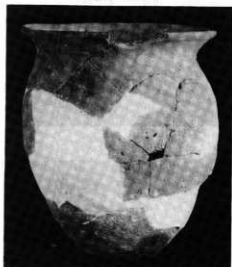
SI 5-3



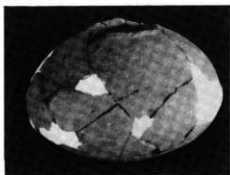
SI 5-4



SI 5-6



SI 5-5



SI 5-7



SI 5-8



SI 5-11



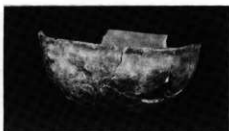
SI 5-12



SI 5-13



SI 5-8



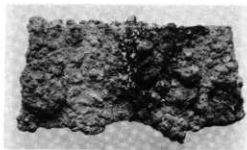
SI 5-10



SI 5-14



SI 5-15



SI 5-16 (表)



(裏)



SI 6-1



SI 6-4



SI 6-2



SI 6-5



SI 6-3



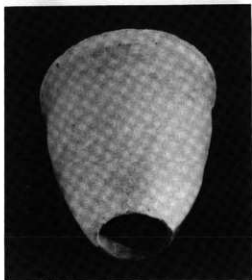
SI 7-1



SI 7-2



SI 7-4



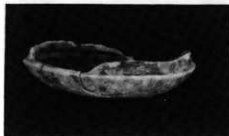
SI 7-3



SI 7-5



SI 7-6



SI 7-7



SI 7-8



SI 7-9



SI 7-10



SI 7-11



SI 7-12



SI 7-13



SI 7-14



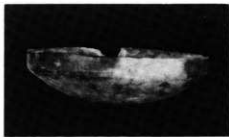
SI 7-15



SI 7-16



SI 7-17



SI 8-2



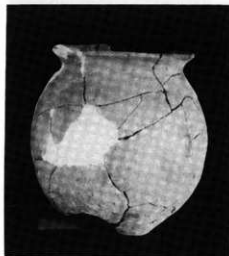
SI 8-1



SI 8-3



SI 8-4



SI 9-1



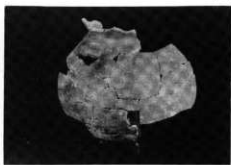
SI 9-2



SI 9-3



SI 9-4



SI 9-5



SI 9-7



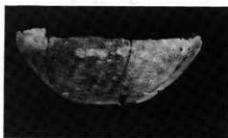
SI 9-6



SI 9-8



SI 9-9



SI 9-10



S I 9-11



S I 10-1



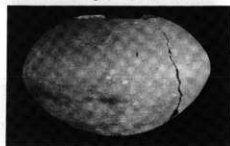
S I 10-2



S I 10-3



S I 10-4



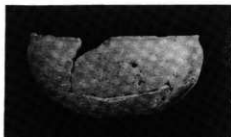
S I 10-5



S I 10-6

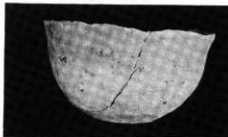


S I 10-8



S I 10-7 (底部)

S I 10-9



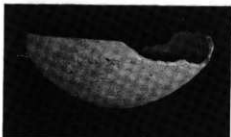
S I 10-10



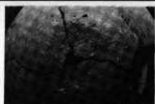
S I 10-11



S I 10-12



S I 10-13



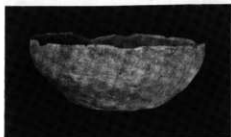
S I 10-14



S I 10-15



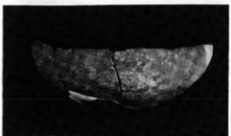
S I 10-16



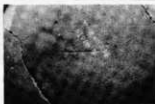
S I 10-17



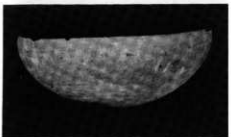
S I 10-18



S I 10-19



S I 10-20



S I 10-21



S I 10-22

圖 版

高 山 古 墳 群



1号墳(前方)・2号墳(手前) 全景 (調査前)



1・2号墳全景 (調査中)



1・2号墳全景 (調査終了時)



1号墳発掘作業風景



1号墳調査風景



1号墳周溝



1号墳主体部土層断面



1号墳主体部



1号墳主体部掘り方



1号墳主体部完掘全景



1号墳完掘全景



1号墳出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第22集
科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書

ツバタ遺跡
高山古墳群

昭和58年3月25日印刷

昭和58年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印刷 水戸市五軒町3丁目6番21号

川田プリント